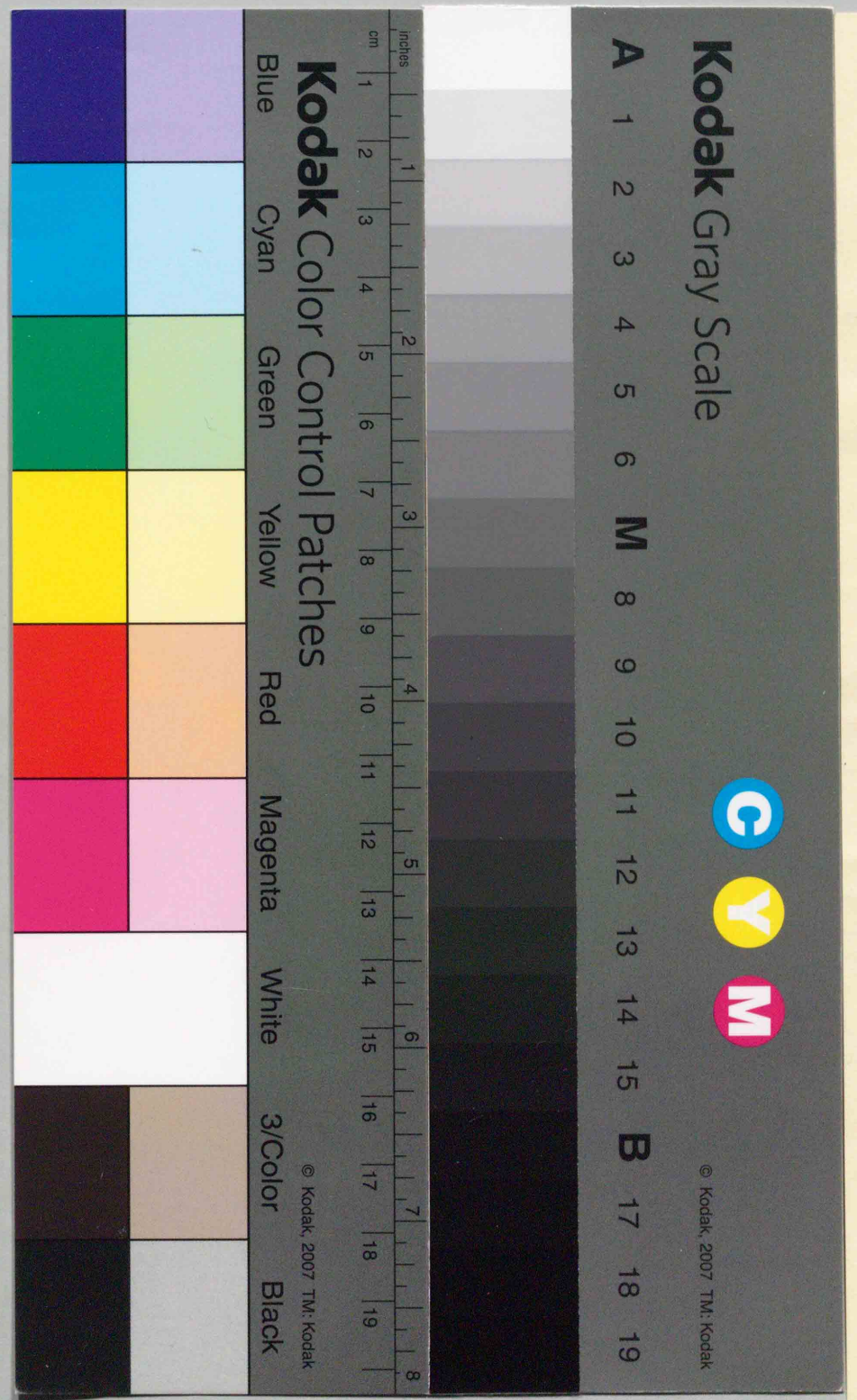
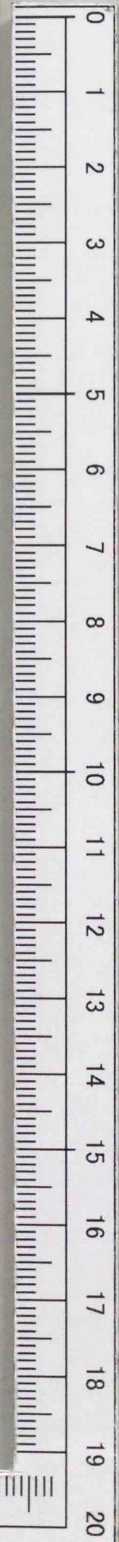


訂新  
近世名著抄  
松井簡治編  
全

3759  
Ma20  
資料室



42052

教科書文庫

4
810
41-1930
20000
43515

C  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak





資料室

375.9  
Ma20

昭和五年六月二十四日  
文部省檢定  
中等學校高等女子學校國語科用



# 新訂 近世名著抄

文學博士 松井簡治 編



東京 株式會社 三省堂  
大阪

## 新訂 近世名著抄 (上級用)

### 目次

一	樂訓と文訓	一
二	旅	二
三	夏	二
四	同じく	四
五	秋	五
六	冬	五
七	道	七
八	學	八
九	讀書の志	九
十	才	九
十一	花月草紙	九

目次



一	序	二
二	月のさしのぼる頃	三
三	代々の亂れ治るきは	三
四	えみしの人	四
五	はや鍋はや鍋	五
六	ことわりの如くせば又病をも得べし	七
七	那須與市	七
八	花の咲く頃	八
九	痕おしなで、響む	九
一〇	四つの時のうつりゆく景色	九
一一	かゝる時黄金持ちて何にかはせん	一〇
一二	物を盡して言ふべきには非ず	一〇
一三	二人の使者	一三
一四	ある醫師	一三
一五	月なき夜半	一四

一六	日新の教	一五
一七	蔗の子	一六
一八	利害得失	一七
一九	若々とあらまほし	一六
二〇	築紬を引きてなだむ	一六
二一	隅田川原の花見	一六

三 松屋文集

一	すゞみのことば	一四
二	立春のこゝろを	一五
三	山春月	一五
四	夏草	一七
五	夕立	一六
六	山家月	一六

四 樞園文集

一	閑中春雨	一四
---	------	----



二	夏旅	四二
三	夕	四三
四	驛	四四
五	夜學	四五
六	漁邨	四六
七	書	四七
五 泊酒文藻		
一	琴後集序	五〇
二	萩をめぐる詞	五一
三	掃衣を聞く	五二
四	漁父辭	五三
五	植村正路を哭す	五四
六	筆の跡を見てなき人をしのぶ	五五
七	縣居翁の墓參會に	五六
六 琴後集		

一	泊酒舎の記	五八
二	知足庵の記	五九
三	隨時樓の記	六〇
四	くもる秋の月を見る記	六一
五	雲をめぐる記	六二
六	上田秋成がもとへ	六三
七	月花のあはれをことわる詞	六四
七 雨月物語と藤篋冊子		
一	夢應の鯉魚	六七
二	菊花の約	六八
三	十雨言	六九
四	古戰場	七〇
八 玉かつま		
一	古書どものこと	七〇
二	學問	七一



三	あらたなる説を出す事	二二
四	からうたのよみさま	二四
五	大神宮の茅葺なる説	二五
六	ふみよむことのたとへ	二六
七	あらたにいひ出でたる説	二七
八	おのが物まなびの有りしやう	二九
九	縣居のうしの御さとし言	三三
一〇	おのれ縣居のうしの教をうけしやう	三五
一一	師の説になづまざる事	三七
一二	わがをしへ子に戒めおくやう	三九
一三	富貴を願はざるをよき事にする論	四〇
一四	ひとむきにかたよることの論	四三
一五	前後と説のかはる事	四三
一六	花のさだめ	四四
一七	道のひめぐと	四七

九 駿臺雑話

一八	しづかなる山林を住みよしといふ事	三六
一九	おのが京のやどりの事	三九
一	老僧が接木	四一
二	直諫は一番槍より難し	四四
三	杉田壹岐	四四
四	燈臺もと暗し	四五
五	月は世々の形見	四六

目次終





新訂 近世名著抄 上級用

一 樂訓と文訓

一 旅

旅行して他郷にあそび、名勝の地、山水のうるはしき佳境にのぞめば、良心を感じおこし、鄙吝をあらひすゝぐ助となれり。是も亦我が徳をすゝめ、知を廣むるよすがなるべし。又いひしらぬ異郷に行きて、見なれぬ山川のありさまを見て、目をあそばしめ、其の里人にあひて、其の所の風土をとひ、あるは奥まりたる山ふところに、岩根ふみて尋ねいり、もとより山水の癖ありて、青山夢に入ることしきりなる人は、心をとめて、歸る事をわすれぬ。あるは海べた、山遠

樂訓・文訓  
貝原益軒の社會  
教育上の教訓  
書。  
益軒は福岡の  
人、寛永年間  
生れたる碩儒  
で、朱子學の泰  
斗。  
正徳四年癸、年  
八十五。



# 敬愛

是も是も...  
 敬愛...  
 遠く...  
 中...

(蹟筆の軒益原貝)

き、眼界ひろきながめは、萬戸侯の富にもま  
 されり、又その里におひ出でたる名産の  
 異なる品を見て、其の味をこゝろむるも、い  
 と珍しく、心なぐさむわざなり。すべて勝  
 地にあそびて見き、せし事、唯一時の耳目  
 を悦ばしむるのみならず、いく年経ぬれど、  
 その時見聞せしありさま、老の後までをり  
 をりおもひ出でられて、あたかもその時見  
 聞せし思をなして、樂しむべし。是を以て、  
 世にめてたき事を思出と云ふも、むべなる  
 かな。(樂訓)

## 二 夏

夏もやうく深くなりぬれば、木として繁らざるはなく、草として  
 榮えざるはなく、日々に物を引延ぶるやうに見えて、ひたすらに緑  
 の色深き夏木立こそ、花にもをさし劣るまじけれ。春の花は所  
 所に咲きて稀なり。夏は山も里も、あるとしある草木ごとに打は  
 へて、皆緑の色なれば、春に異なる眺なり。八千草に植集めてなづ  
 さひし前栽の草木ども、雨をおびて各その梢をあらはし、所得顔に  
 心にまかせて生茂れるも、うれしと見ゆ。

昔おほゆる花たち花のかをれる夜は、追風もいとなつかし。早苗  
 とる此田家は雨を待ち得て、いそがはしく賑はし。此のころ遣水  
 のほとりに飛ぶ螢の音もせて、すたくを見れば、鳴く虫よりいとあ  
 はれむべし。  
 夏山のけしき、青みわたりたる高き峯、大空につらなりて、雲の外に  
 そびえたるを、あくまで見るこそ、殊にすぐれて、心を快くする眺な

昔おほゆる云々  
 さつきまつ花桶  
 の香をかげば昔  
 の人の袖の香ぞ  
 する。(古今集)  
 鳴く虫より云々  
 おとせ思ひ  
 にもゆる螢こそ  
 なりけれ。(後拾  
 遺集)



白樂天が云々  
放眼見青山  
(白氏文集)

れ。白樂天が眼を放にして青山を見るといへる如し。(樂訓)

三 同じく

蓮葉の云々  
はちすばの濁に  
しまぬ心もてな  
にかは露を玉と  
あざむく。(古今  
集)

みな月の比になりぬれば、端居の風したしく、わらふだ敷きて居るも心よし。池の心ふかく、蓮葉の濁にしまずして、花ならで夕風にほひわたるだにも、異草にすぐれたり。ことに花の笑の唇ひらけたるは、所せきまで薰りみちて、世に似たるものなく清らなり。涼を逐つて木陰にやすらひ、木々の下風のなつかしきに清き泉をむすび、夏をわするゝ心地するも、いさぎよし。光明けき夜半の月を清き水に宿して見るは更なり。遣水の音など聞くも、いみじう心ゆくばかりなり。日ごろへて、暑さたへがたきに、夕立のしぐれわたりて、名残すゝしきも、いと心よし。清少納言は「夏は夜といひつれど、ゆふべは蚊といふ虫人をさして、年老いては、殊更いみじう

たへがたければ、唯このねぬる朝けの風の涼しきこそ、清くして心にかなひ侍りつれ。(樂訓)

四 秋

秋は夕暮のけしきこそ、たゞならず見ゆれ。うす霧のまがきに立ちのぼるよそほひ、風のおと、虫のね、いづれとなく人の心にしみて、春にもまさり、あはれ深し。秋は夕と誰かいはざるべきや。夜長ければ、曉のかね人をおどろかしやすく、ねざめがちなり。ことさら老のねぶりは早くさめて、常に夜を殘せば、いのねられぬまゝに、懷古の心、殘夜に生じて、來しかた行くすゑの事、思ひつゞけらる。老いては常に昔の事のみぞ忍ばしき。(樂訓)

五 冬



木の葉ふりて云々  
冬の來て山もあらはに木の葉ふり残る松さへ峰にさびしき。(新古今集)

冬も來ぬれば今朝よりなる、埋火のもと、やう／＼立ちはなれがたし。露と霜とおきかはし、紅葉いろ濃く、木々のこずゑ、淺茅が原も、冬枯の景色となり、おもがはりするも、秋にことなる眺なり。神無月のしぐれもすぎて、日あたゝかなれば、すこし春ある心地す。むべ此の月を小春とぞいへる。されど一の日二の日、やうやくかさなれば、風氣いよ／＼はげしく、木の葉ふりて、山もあらはに見え、残れる松も峰にさびし。春夏秋のえんなる景色よ、そほしかりつる有様、皆此の時にいたりて盡きぬれば、ことの外にもかはれる空かなと、目おどろかれぬる。日頃雪いみじう降りて、いかめしう積りたる曉は、山も里もひたすら銀世界となりて、世かはり景色ことなるありさまなり。冬ごもりせし梢の枯れたるも、ふたゝび花さけるが如し。ことさら冬の夜のすめる月に、雪の光りあひたる空こそ、見る人もなく、ひとり身にしみて、あはれも深けれ。空はれて

後まで、友待つばかり所々に消え残りたるは、だれ雪もいと心にくし。かゝる時、するわざなく、唯袖ぐゝみして、いらゝぎ居る人はいとわびしげに見ゆ。或は埋火にむかひ、文をまきひろぐるを以てわざとする人は、樂深くぞありぬべき。およその事年に先立ちて早くはかるべし。若き時つとめて文をよみ習はゞ、かかる時もわびしかるまじ。(樂訓)

六道

つく／＼と思へば、樂おほきこの世なるを、道を知らざれば、我と心をくるしめ、天をうらみ、人をとがむ。かく道を知らでうれひおほき人は、くれまどふ心のやみこそむげに愚なりといふべけれ。人の身金石にあらず、生けるもの終に死なざるはなし。又二たび生れくる身にあらざれば、この世なる間は、樂みてこそありぬべけれ。

天をうらみ云々  
子曰、不怨天、不尤人。(論語)



朝に道を云々  
子曰朝聞道夕  
死可矣。(論語)

れ。くやしく過ぎしむかしの事は、すべきやうなし。いくばくな  
らぬ齡なれば、今よりのち、一日も早く日月ををしみ、先のひが事を  
くいて、飛驒たくみうつ墨なはにあらねども、唯一すぢに善をこの  
み、道を楽しみて過ぐさんこそ、この世に生けるかひあるべけれ。年  
老いては、同じことするならひなれば、あまのたくなはくりかへし、  
かくいひひくいて、たまくしげあけくれ自ら心をいましめ、又人に樂  
をすゝむるなかだちとするならし。かへすゝわれも人もかく  
生れつる樂を知らず、身をいたづらになし、さてもかひなく世に朽  
ちなん事うらむべし。もし朝に道を聞ければ、人となれるかひあ  
りて、夕に死ぬとも、また何をかうらみんや。(樂訓)

七 學

かたちうるはしく、ものよく言ひ、よききぬ着て、賓客に對し、すがた

目たつき  
目たつべきの誤  
か。

言葉はすぐれて、人のもてなしよく、そのふるまひうるはしく、目た  
つきほどなれど、文字を知らず、古今の事にうとくかたこと言ひて、  
人の耳にたてば、すがた言葉のうるはしきもむなしくなり、人に見  
おとされ、あさましく下さまに見ゆるは口惜し。(文訓)

八 讀書の志

凡世の中のことすべてわが心にまかせがたく、我がまゝならぬ事  
のみぞおほかる。たゞ讀書の一事のみ、わがなさんと思ふ志だに  
あれば、つとめて思ふやうにせんも、我が心のまゝなり。それだに  
おこたりてなさず、いたづらに月日をつひやせば、いふかひなくて  
まことに惜むべし。(文訓)

九 才



すこし才ありと見えて、物書き藝ある人も、其の心平實にして、わが才をかくしてほこらざる人は、おくゆかしくうるはしと見ゆ。多才なる人も、わが才をほかにかゝやかして誇る人は、多くは人をそしる。おのれにほこり人をそしるは、其の不徳なるくせのほどあらはれてあさまし。かゝらざりせばよからましと思ひて、あたらず才學あるも、玉の盃の底なきが如く思ひくたされて、其きずうらめし。(文訓)

玉の盃云々  
爲人主而漏泄  
其羣臣語 譬猶  
玉卮之無當  
(韓非子)

## 二 花月草紙

### 一 序

久しう浦わの里に住める翁ありけり。めかり鹽焼く暇には、えうなき藻屑かい集めて、しほやの窓の戸にかいはさみ置きたるを、世のえせものの取りて歸りにけり。またの年行きて見れば、こりずまにかいはさみ置きたり。かく白浪のよるくごとくに數も積みしかば、遂にこの卷々となりぬとぞ。この藻屑の端つ方に、月と花との事ながしく書いたれば、それをもて名たてしは、かのえせもののせしことなりとぞ。「海人のさへづりとこそ言はまほしけれ」と里の子は言ひき。

花月草紙  
磐城白河の城主  
松平定信の隨  
筆。定信は樂翁  
と號し學問を好  
み、大に文教を  
振ひ起した。  
文政十二年、七  
十二歳で歿し  
た。







こよひの月夜云  
云  
わたつみの豊旗  
雲に入日さしこ  
よひの月夜あき  
らけくこそ。(萬  
葉集)

見れば、雲間もはやむらく、青く、入日の方はこちたきまで紅深く  
見ゆるにぞ、こよひの月夜あきらけくこそ。」と思ふに、月出づる頃  
は雲出て、また玉水の音するものぞかし。代々の亂れ治るきは  
も、わが心の上もこの如きものとかや。

四 えみしの人

えみしの人に飯を與へければ、いと喜びながらそこら食ひこぼし  
てけり。「やよ、米は玉の緒つなぐものなるを、などかくおろそかに  
なすか。」といへば、われ等は、米食ひて命をまたうするにはあらず、  
鮭といふいを食ひて生くるを。」といふ。「さても、鮭のいをにて命  
をばのぶるならば、それをば尊ぶべからん。いまその足に穿きた  
るものは、鮭の皮ならずや。」といへば、しばし頭かたぶけて、君の足  
につけ給ふわらうづとやらんは、かの米の出でくる草にはあらず

辨  
(あかる)

浅草寺  
浅草區藏前通の  
端にある。  
俗に浅草の観音  
といふ。

や。」といひしにぞ、侮るまじきことよ。」と人のいひきとぞ。わが  
國の人は他所の事を知らねば、えぞ人のなりかたち、わが國の人と  
違へば、いと愚にて何も知らぬものよと思ふたぐひぞ多き。それ  
より唐國にてもあれ、えみしの人にもあれ、たゞ姿の見馴れぬを  
見ては腹かゝへ、言葉のわきがたきを聞きては又笑ふ。「心せばく  
他所見ぬ故なるべし。」といひぬ。

五 はや鍋はや鍋

年の暮に浅草寺のあたりに市といふ事ありて、ことに人多く出づ  
るなり。或人薩摩の國より、鮑の貝おほく買ひ求めてけり。その  
貝の穴をふたぎ、木もて蓋を作りて、その市にて賣らんと計りける  
が、折節さはる事あれば、人に頼みて、晝つかたには來るべし。それ  
までに賣りてたべ。」といふにぞ、もて出で、賣るに、かへりみる人



もなし。さればよ、かうやうのもの此の市にて賣りしためしなきを、えうなき事に時費すものかなと思ひつゝ、いかに賣れども買ふ者なければ、ゆききの人の袖ひかへて、これめさせ給へ。」などいふに、引きはなちて行くめり。

晝過ぐるころ、かの人來りて、いかにと問へばかくといふ。「何といひて賣りし。」といへば、べちに何とかいはん、『貝焼の貝めさせ給へ。』とて賣りし。」と答ふ。彼ほゝゑみて、我が賣るを見給へや。」とて、いと聲高に、はや鍋、はや鍋といへば、過ぎゆく者は立還りて買求め、そこら行く人も聲をとめて買ひぬ。見るがうちに多くの貝を皆賣りてけり。

この市は人多く出づれば、殊にかまびすしくて、靜に心とむる者もなければ、手桶賣る者は、さはら、さはらといふ。さはらの木もて作りし手桶よと言ふいとまもなく、聞くひまもなしとかや。物の勢

といふものも、またことわりの外なるものなりけり。

六 ことわりの如くせば又病をも得べし

「夏は麻の衣を着るべし。冬は綿入れし衣重ぬべし。」といふは、ことわりなり。されど、伏陰あるをりは、夏も綿入れし衣着ることもあるべし。冬も愆陽ある折は、ひとへあはせの衣をも着るべし。さるを、ことわりの如くせば、また病をも得べし。今の世、たゞに理のみいひて、國を治め人を治めんとするものは、かゝる事やあらん。

七 那須、與市

「那須、與市は弓の上手にてもあるべけれど、馬を海に乗入れて風にうごきて定らぬ扇を射んといふは、いと難きことなり。射損じなば死ぬべしといふも、さもあるべき心なるべし。たゞ扇にのみ心

那須、與市  
名は宗高、義經  
に従つて屋島の  
合戦で扇の的を  
射た。



ありて放ちたりとて、必ず中るべしとも言ひがたかるべし。さるに心にたちかへりて、神に祈念したるにて、心はうちにとまはりて外へ馳せず、つひに思ふ矢つぼたがはざりしは、わが心の誠にかへりて神明・良能の妙の出でしなり。」と言ひしが、さあらん事もありぬべし。

八 花の咲く頃

花の咲く頃、雨の降出でたるに、風さへ添ひぬれば、必ず花の時、雨風のうさ添ふならひにて、人の世の別れ離るゝことわり見することこそ。さりとは、つらき雨かな、うき風かな。」といふを聞きて、「雨降るとても、五月雨のやうにはあらず、はげしとて夕立のやうにはあらず。風添ふとても、秋の末つ方の野分または木枯のやうにはあらぬものを、花を惜めば、ことさら（あか）に雨も風も世になきやうに

思ひ給ふか。」といひき。

九 痕おしなで、譽む

何にかへじと思ふみどり子の這ひまはるを見て、げにこの子は行末（ま）ざえも秀でぬべし、乳房見すればひたすらに這ひ行くめり。心にさからふことあれば、ありあふものもて人を打つ。わが、この頭の疵を見給へ。この子の煙管もて打ちし痕なり。親とても心にとがへば、かくするぞ心のすなほにはある。年のほどより力もありて、この疵をいでかじにけり。」と、痕おし撫で、譽めぬるを、愚なるものも笑ひにけり。笑ふ人よりは賢き人なるが。

一〇 四つの時のうつりゆく景色

四つの時のうつり行く景色こそ、またなくをかしきを、咲かざるを



りの花を咲かせんとし、散る頃に散らさじと思ふは、いとくるし。散れば又こん年は咲きぬべし。いかに心を苦むとも、霜白く氷堅きをりに、蓮の咲くべきことわりなし。されど、咲くを待ち、散るを惜むは道なり。散るをもよそにして心とせぬは、道知らぬ心なるべし。

一一 かゝる時黄金持ちて何にかはせん

いやしき者なりけるが、常食ふべき米をも食はず、ひさぎて黄金にかへて、命にもかへじと袋に入れて持ちゐたるに、秋の末つ方にはかの水出でにければ、かの袋をくびにかけて高き所へ行かんとするに、はや水嵩たかくて行くべきやうなければ、せん方なく木に攀ぢのぼりてけるが、殊の外に飢に臨みけり。さるに、米いさゝか苞にし負うて水遊ぶ者を見て、かの袋の黄金を見せて、これを皆まゐ

らせん。その負ふ所の米いさゝか分けて給はれ」といへば、いと怒りて、にくきをのこの言ひざまかな。かゝる時黄金もちて何にかはせん。」と言棄て、遊び行きしとなり。

一二 物を盡して言ふべきには非ず

雲の上のやんごとなき君おはしましけり。その御子の御傍にましましけるが、そともより風の吹來て燈火の光定らざりければ、人召して、風の吹來るぞ。燈火消えなん。さうじたてよ。」と言ひ給ひければ、父君ことに怒り給ひて、さやうなることばつかひしては、歌はいかてか詠むべき。」とて、むつかり給へば、御子はいと恐れてしそき給へり。御次に居たるもの、いかゞしたる御教ぞと思ひて、御色うかゞひて問ひ奉りければ、物を盡して言ふべきものにはあらず。」と宣ひきとぞ。



一三 二人の使者

二人連れだちて、相見る人にあひて、君の仰によて、こたび旅立つ事あり。いかに侍らん。見給へ。」といひしに、相者見終りて二人とも必ず、旅にて難あらん。慎み給へ。」といひぬ。一人は、いそぎの御事なれど、旅の道にて難あらば、おのづから君の仰も滞るべし。遅くとも難なきに如かじ。」とて、燈火消つ頃、宿を出て、日の暮るゝ頃には宿りをとる。一人は、とみの御使なり。慎むとは君命を慎むには如かじ。この身はたとひ難に遭ふとていかゞはせん。」とて星を戴きてやどりを<sup>トモ</sup>出で、燈とりて宿をとる。されば、ことに早く思ふ方に着きければ、君よりも賞を得たり。一人の方は、遅し。」とて罪にあひにけり。されば、相はともあれ、わがすべき所をつとむれば、難なきものよ。」と言ひてけり。

一四 ある醫師

ある醫師ありけり。病む者あれば、かみしも選まずいとせちに心を盡しけり。いといたう賤しき者病めるありけり。藥箱出いて藥調ずるに、その母なりける老婆のつくづくと見て居しが、おざり出でて、はかりなることながら、ねぎおもふ事こそ侍れ。」とて、いと言ひかねたるを、何の事にもあれ、思ふことは打ちあらはして言ひね。」といへば、つまましげに聲ふるはして、下に組みおき給ふ箱の御藥も賜はれかし。」と言ひけるにぞ、思はずほゝゑみて、さらば與へん。」とて、下にありしがうちの障なき藥二つ三つ取出て、調ぜしが、必ずその藥はしるしあるべしと語りぬ。かく愚なる者に、この病には何といふ方劑調ずることなり。それは何々の藥を用ふ。この箱の上の方におのづから入れおきたれば、取出して調



ぜしなり。下に組みたる箱のとして貴き賤しきの隔はなし。」とま  
めだちて言ふとも、いかで聞きわくべき。さはりなくば、その心に  
任するにてこそ、をかしかりけれ。

一五 月なき夜半

月なき夜半は、いと心の底澄みまさるものなりけり。海のおもて  
暗うして、寄來る波の音ゆたかにして、磯邊の松にも音せぬ風の袖  
にそよと吹きかふに、晝の暑さも忘れぬべし。秋はなほ蟲の音も  
きそひ行くに、千草の花の色も、見えて、沖漕ぐ船にまがふ雁がねの  
渡るも、いづこなるらんと哀なるに、浦のあしべに聲あはせたるも  
をかし。まいて曉頃に月の出づれば、宵の入日の残れるたぐひに  
はあらず。海のおもて黄金の波の満ちくるにぞ、言葉にもものぶべ  
しとは思はぬ。昔いぎたなくて、有明の月にうとかりし頃もあり

鳥去り  
スル  
著は  
ぬと  
士志

けりと思へば、口惜しきものから又羨しくも思へり。それより思  
の移り行きて、げに古はあしき波にも舟浮けて鯉釣りしこともあ  
りき。又はいと寒き頃海に入りて鮑とりしこともありしが、今の  
わかうどは、まだきに老いぬるさまするものぞ多き。その頃の昔  
物語に聞けば、浦曲の戦のおそろしさに、妻子打連れて深山へ入り  
し世もありき。」と聞きつるに、月なき空にも心のたのしびを極め  
ぬるは、いかにぞや。かゝる事もかのわかうどの老いたるさます  
るをも、あはせて言はまほしけれど、また例の老いぼれて繰言いふ  
とやむつかりなん。

一六 日新の教

「おほよそ躬行にてもあれ、人事にあづかる事にてもあれ、政にても  
あれ、新なりといふ文字を忘るべからず。日に新なりといふはも



のかは、事々に新に、物々に新なるべし。昨日の事に馴れて思ひあやまるも、かねて知れる事と思ひてやぶれとるも多し。かの賢き人も、女などに迷ひ、愚なる人に欺かるゝも、ひとつに新ならねばこそありけれ。昨日にくしと思ひし事心にそみ、去年のうれしと思ひし事心につきて離れねば、それより根ざして迷ふとか聞けり。げに日新の教こそ、よろづにかよはして身を終ふるまでも忘るな。」と語りし老人もありけり。

一七 鶯の子

鶯の子のすだちする頃、兄鳥の巢より飛出でしに、弟のは羽もいまだ整はざるを知らず、つひに飛びたれば、梢より落ちてけり。親鳥いかに思へども、形ははや親にまさるばかりに、羽のふくらかにおひたちたれば、せん方なく、巢に入りて呼べどももとより飛得ざれ

イダ  
コ  
フ

ば、立返るべきやうなし。二三日たちて見るに、同じところうづくまり居たり。捕へて見れば、動きもやらず、いと飢ゑに飢ゑたるさまなれば、一夜さまゝ、餌を與へてけり。あけの日は餌をやらんとすれば、恐しき姿しておどす。昨日は飢ゑてければ、その心も出で来ざりきと見えき。人をおどすはにくけれども、このまゝにして殺さんも忍びずとて、はぐみやりけり。二十日ばかりたちてければ、羽もよく整ひぬ。さらばとて、もとの木蔭に連れゆきて、籠よりやをら出したれば、おのれからうじて逃出でしさまして飛行きぬ。親鳥も人のかくしてかくは放ちしは知らず、かしこく籠を遁れ出でしよと心得しさまして、連れていにけり。

一八 利害得失

事に處するに、利害得失に心をつくるも宜なれども、まづその事の



筋をよく見て、さて利害得失をも照し見るべし。世にいふ才あるものは、まづわが利害得失はやく見ゆれば、利に就き害に遠ざからんとのみして、その筋を失ふなり。たゞ害ありとも、かくすべしといふは、いといたう重き筋の事なり。されば、その筋の重きと軽きと、利害の重きと軽きとをかけ合せても、その筋の方重きは害にあふとも、その筋にしたがふべし。また才なくして筋にも暗く、たゞ一筋に心得るものは、筋の軽きにも重き害を得て辭せずとするもありぬべし。才ありても道まねびて明かなるにあらざれば、輕きを重しとして、つひに道失ふものこそ多かめれ。

一九 若々とあらまほし

家國の姿は、若々とあらまほし。もし年老いたる姿になりもて行かば、物事沈みはて、人に見知られじと、物の色目も花やかならざ

桀・紂  
夏の桀王・殷の紂王

れと思ふまでになり行くぞかし。その心よりして、人に秀でんのももとよりなければ、物の堪能上手もたえはてぬるものとなん。

二〇 桀紂を引きてなだむ

「わが悪しきをば桀紂を引きてなだめ、人の善きをば堯舜を引き出でてとがむ。『かれはかゝる悪しき事なしぬ。』といへば、『げにさあらん。』といふ。『このものかく善きことし侍りぬ。』といへば、『いかゝあらん、いぶかし。』といふ。げにも人は悪しき心あるものかな。』といへば、善き名得まほしと思ふが故に、人の悪しきにてわが心をなだめ、人の善きをば嫉むより出でくるなり。」と言ひき。

二一 隅田川原の花見

今日はいと長閑なり、いでや隅田川原の花見んと、小舟に乗りて行



きたるが、花見んと立出づるもろ人のさまげに都のみやびを盡せり。さまざまの心々に打むれて行くに、女房なども何か口たゞきつゝ、心空にありくもあり。馬馳せて花をも眼にかけず、いとばうぞくに行くもあり。やごとなき人にや、人々うち圍みてつゝましげに行く女もあり。あるは木かげにて、はや瓢傾け、何やらん、やたて出し書いつけ、かうよりして花の枝につけて、われはがほなる風情なるもあり。  
今日はげに晴れに晴れて一天に雲なく、富士も筑波も手にとるばかりに見えたれど、またそれを打眺むる人もなし。ましてかく晴れたる日は、とみに雨風のあるなどいふことは、つゆ思ふ者もあらじかし。この長閑なる御代の春の御恵にぞ、かく心ゆたかにたのしび遊びて、かへさ忘るゝばかりしても、何のわづらひうられひもなきに、この花も昔よりつきぬ御恵深き露に生ひそひきとやらん聞

かりがねに云々  
春霞たつを見す  
て、行く雁は花  
なき里に住みや  
ならへる。(古今  
集)

鶯の音ばかり云  
云

秋風に聲をほに  
あけて来る船は  
あまのと渡る雁  
にぞありける。  
(古今集)

けば、さ思ふ人もありやなしやと見れど、王世の民の心とや、かゝる照る日の恵をば思ひも寄らず、いつもかく空晴るゝものとはばかりも思はぬ輩多からんなど思ひかへして、四方をふと打見れば、筑波根のあたり、いとほそくひらめきたる雲こそありけれ。この雲よ、世にはやてなどいふものなりけり。あまりに朝よりめづらしく晴れたる日なればとて、かねて簑も笠もはなたで居しが、はや鶯おしたて漕ぎかへるを、いかに、この花を見棄ててかへるはかりがねにつらさやならへる。鶯の音ばかりまなべよかし。など口々にわらふを耳にも入れて漕去りぬ。いつかその雲のいとひろごりてけるが、かの輩は露も知らず。日のかげろふも知らず。今日はあつきばかりなりとて、肌ぬぐもあり、または衣などぬぎて馳せありくもありぬべし。  
雨にさきだつ風のひと通り吹落ちたれば、こは花よと思ふ間もな



く、いさご吹立てたれば、たゞ驚きて居るが中に雨の降り出たり。初は心地よき雨などともいひたらんが、後には人の聲に雨の音もせず。馬を馳せてかへるもあれば、おどろきあわて、堤よりまろび落つるもあり。女などはいといたう見苦しきまであわてふためきて、はじめ装ひしをも自ら夢とや思ふらんさまなり。まして酒に酔ひて濡るゝも知らず顔に笑ひなどするもあれば、思ひ寄りぬおろかなる雨かな。」と怒りのゝしるもありぬべし。かの舟は早く漕ぎゆきぬれど、わが住む浦は遠ければ、とある橋の下に舟とめて居しが、橋の上など人の走りさわぐは、なるかみのやうに聞えぬ。はや雨もかぞふるばかりに川のおもに見ゆる頃、夕月のことさらに新しく磨き出たれば、はや雨の名残もなし。堤の花いかゞあらんと漕ぎかへして見れば、その頃ははや人もなし。櫻の木の間にほのゝと月の見えたるは、わがためにつくりなし

けんと思ふばかりなり。濡れにし人はいかゞしたりけん。この月などは思ひも寄らであらんなど、ひとり思ふも何となく心おごり行きぬ。かぞいろもわれひとり人にこえて心地よしと思ふときは、といましめ給ひたれば、またあやまちやしぬべくとおそろしく覺えければ、飲み残したる酒携へてつひに漕ぎかへりぬ。



三 松屋文集

一 すゞみのことば

松屋文集  
藤井高尙の文集。二卷あり。松屋はその號。高尙は備中の人、宣長の門人。吉備津宮の宮司、天保十一年歿、年七十七。宮城野ならねど云々  
みさぶらひ御笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり。(古今集)

夕だちしてなごりすゞしさに、ひき、けいしをはきて、庭の木かけをたゞみありけば、蟬のくるしげなりしもいとすゞしき聲に聞こゆ。かぜにうち散る木の下露は、宮城野ならねど、雨にまさりてしとゞにぬるれば、ひや、かなるに、夏をわする、こゝちして、めづらしくをかしければ、笠もとらてたてるに、やう／＼こしいたくなれば、かたへなるすのこたつものにしりかけて、猶歸りいらんことはものうくおぼゆるをりしも、わらはべの來て、いざとくれいの所におはして夕さりのものきこしめせ。日も暮れぬべし。といふはにくゝこそおぼえしか。

立春のこゝろを  
あけのぼる朝陽の光に  
はなはたけり春の気  
あつてははやくも  
あけのぼる朝陽の光に  
はなはたけり春の気  
あつてははやくも  
あけのぼる朝陽の光に  
はなはたけり春の気  
あつてははやくも

(蹟筆の尙高井藤)

二 立春のこゝろを

あけのぼる朝陽の光に  
はなはたけり春の気  
あつてははやくも  
あけのぼる朝陽の光に  
はなはたけり春の気  
あつてははやくも  
あけのぼる朝陽の光に  
はなはたけり春の気  
あつてははやくも  
あけのぼる朝陽の光に  
はなはたけり春の気  
あつてははやくも



はでいのちながかれとのすさみにぞありける。今日（九月）はぬの衣もいたうなれぬにきかへて居れば、よろこびにとてくるまらうどもうるはしう麻のかたぎぬ小ばかまきて、かどなる松のちとせをかねたることぶきいふなどげにものごとにあらたまりてなん。

三 山春月

「しくものぞなき」と昔のなにかしがいたくめでしも、此の頃の月ならんと、そらに心うかれて、くるゝよりはしちかくゐて、ながめつゝ、まつに露ふかくたちおほひていとゞくらういぶせきに、山きはのやうくあかくなるは、出づるなりけり。露もすこしは晴れて、照りもせずくもりもはてぬながめは、さやかなる秋よりもまさりて、こゝろしれらん人に見せばやと、この月ばかりにもいはまほしうなん。

しくものぞなき  
云々  
照りもせず曇り  
もはてぬ春の夜  
の臘月夜にしく  
ものぞなき（新  
古今集）  
こゝろしれらん  
云々  
春の夜の月と花  
とを同じくば心  
しれらん人に見  
せばや。（後撰  
集）

四 夏草

庭の面も見えぬばかりに、ことさらに草をしげらせて、人の怪しみとがめたるに、ますらをのこゝろは天の下をはらはんとこそおもへ。」と、かしこげに誇りてうちいひたるは、にくきから人のさかしら心にぞありける。しげりたるは、いとものむつかしければ、ときどきはらふこそよけれ。されど五月雨の頃は、えしもはらひあへずかし。はれまくに庭にいで、ふぐしだつものして、みじかきをもほりて、こにいれて、わらはしてすてさせなどするを、はてはものうがりて、あくびうちして、やうなきことしたまふものかな。あすあさてのほどには、またもとのごと茂りぬべし。」といひて、むつかしげにおもひたるけしきなるも、いとほしくて、はらひさせば、げにひと日ふつかのほどに、またいみじうしげりて、まだきに秋の

大丈夫  
ますらをの云々  
大丈夫處世當  
掃除天下。（後  
漢書）



野のやうになんなりぬるよし。今ははらはで此の草むらをあき  
まつむしのすみかにせんとおもへば、わらはがいさめもうれしう  
なん。

五 夕立

いみじうあつきころも、朝夕すゞみといふことのありて、しばしが  
ほどはいきのぶるわざなるに、あやしうあしたよりまたなくあつ  
さのたへがたき日なん有りける。みな人、けふは夕だちすべし。  
とぞいふなる。まことに午のとき過るほど、けしきづきて、遠方の  
峯に墨の色なる雲ぞたちのほりたる。されどいとはるかなれば、  
此のわたりまではふりもこじと思ひて、あつさのまぎらはじに、手  
習などしつゝ、さる心もなきに、にはかに風吹き出で、ほぐどもちら  
せば、こはいかにとおどろきながら、はしりありきて、とりしたゝめ

などするほどには、はやふりきて、ふきいるゝ雨のあしよこさまに、す  
のこなどはおどろくしうぬれわたりぬ。神さへいみじうなり  
ひらめけば、ものおぢするわらはべをんなども、はいたうわなゝき  
まどひて、とばりのうちにかくれ伏して、耳ふたぎつゝ、いかさまに  
せんと思ひたるさまいと心くるし。からうじて、神なりやみぬれ  
ば、簀の子のはしにゐざりいで、見るに、やゝはれ行く雨の末に、か  
すかなるひかりのほのめきたるは、さるおそろしかりしなごりも  
なく、いとすゞしきながめなりけり。

六 山家月

身をかくすべき宿をもとめて、山里にうつろひ住みそめたる頃し  
も秋なりければ、ものゝさびしさやらんかたなし。されど世のう  
きに思ひくらべつゝ、ねんじをるに、やうくすみつきて、椎の葉の



あまりくまなき  
云々  
住みわびて身を  
隠すべき山里  
にあまり隈なき  
夜半の月かな。  
(千載集)

風フウにそよめくおとも耳ミミなれぬれば、いたうものすごうもあらず。  
さサるかたカタにニをかカしきキことどもおほかる中に、月ツキのあかき夜こそ  
あアはれレさサもモをヲかカしシさサもモとトりリにニいイみミじジけケれ。  
ほホどドなナきキ軒ケンばバな  
れレばバ、うウちチもモあアらラはハにニさサしシ入イりリてテ、さサうウじジにニ松マツの影カゲのうウつツりリたタるルな  
どド、さサなナがガらラ繪エにニかカきたタるルやヤうウなり。  
あアまマりリくクまマなナきキ月ツキのノかカげゲか  
なナとトうウちチずズんンじジつツ、あアくクがガれレ出デづズるルに、木キのノ下シタ道ミチもモたタどドくクしシか  
らラずズ、岩イハもモるル音ネのノさサやヤかカにニ聞キゆるルかカたタをヲとトめメ行ユきキてテみミれレばバ、山ヤマ水ミヅの  
さサよヨらラなるルなナがガれレにニやヤどドれるル影カゲ、いイとトしシづズかカにニ見ミゆ。  
月ツキもモかカゝるル  
とトころロはハすスみミよヨきキにニこコぞ。

### 四 檀園文集

#### 一 閑中春雨

花盛ハナはハさらラなりリ、さらラでもモ柳ヤナギなどドあアをヲやヤかカにニうウちチけケぶブりリ、うウらラくク  
とト照テりリたタるル日ヒはハ、蕨ワケつツくクしシなナどドいイかカならラんとト、野山ノヤマのノさまマのノみ  
戀コイしシうウおオもモひヒやヤらラれてテ、いイほホのノうウちチにニはハこコもモりリぬヌがガたタきキをヲ、人ヒトさサへ  
ゆユくりリなナくクとトひヒきキつツ、近チカきキわワたタりリまマでデ、いイぎギくク。などド、そソのノか  
すスめメりリ。雨アメのノ降フるル日ヒはハ、さサるルことトもモおオもモひヒたタえてテ、人ヒトはハたタおオとトづズれ  
ねネばバ、文机ブンキにニのノみミよヨりリゐイたタるルなナかカくクにニをヲかカしシうウなん。  
萱ウハふフけるル  
軒ケンはハ雨アメのノ音ネしシづズかカにニてテ、池水イケのノあアやヤこコまマやヤかカなるルにニ、いイとトふフかカうウ霞  
めメるル梢サカよヨりリ翅テしシをヲれレたタるル鳥トリどもドモ、そソこコはハかカとトなくク飛トビびビわたタるルな  
どド、いイとトいたタうウをヲかカしシ。暮クれレぬヌればバ、まマしてテいイとトしシめメやヤかカにニてテ、見ミる

檀園文集  
中島廣足の文  
集、三卷あり。  
廣足は熊本の藩  
士、檀園はその  
號。文久四年歿、  
年七十三。



秋曉山

足島

あつたへがたくてはか  
ひるのまはあつたへがたくてはか  
しうもえあゆまねばあさかげのほどにこ  
そはとて鳥の聲とともにおきいでゆく  
にありあけの月くまなくすみわたりなみ  
木の松風すしく吹きとほりてほろく  
とこぼるゝ露のたもとにかゝれるもいと  
こゝちよし

(蹟筆の足廣島中)

書さへ今一きは心しみぬ。風すこし吹出  
て、とうだいの火のまたゝきたるに、何とも  
知らぬ花の香の、ほのかにうちかほりたる  
などもをかし。

二 夏の旅

ひるのまはあつたへがたくてはか  
しうもえあゆまねばあさかげのほどにこ  
そはとて鳥の聲とともにおきいでゆく  
にありあけの月くまなくすみわたりなみ  
木の松風すしく吹きとほりてほろく  
とこぼるゝ露のたもとにかゝれるもいと  
こゝちよし

みちのかたへなる田のものに、人のおとなひのするを、なにかと見  
れば、車の上へのぼりゐて、水ふみいるゝなりけり。夜さへかゝる  
わざするは、いかばかりかはくるしからましとおもふに、わが旅の  
うさもいさゝかなぐさみぬ。  
ほどなくあけ行く横雲のそらに、やまがらす飛びわたりつゝ、日ぐ  
らしのなき出でたるなど、いみじうをかしきに、いな葉の露の所せ  
きまでおきわたしたるが、葉末へのぼりて、かつゝこぼるゝさま、  
見る目もいとすゞしくおほゆ。さし出でたる日影のやうくた  
かくなり行くに、けふこゆべきなにかしの山路おもひやるも、まづ  
いとくるしう。

遠山寺の入相の鐘、ねぐらにかへる夕鳥もいつしか聲しづまりて、

三

夕



むかへる文卷もやうく見えずなりゆくに、心ゆくわたりは、いとくちをしきものからし、しばし打ちおきて、端の方にいづれば、くれのこれる梢どものほのかなる山のはに、はつかにあらはれたる三日月の影こそいとをかしけれ。青鷺とかやいふ鳥のあやしき聲になきゆくが、何となくものさびしげなるを、來んといひつる友はたくれ過ぐしてやとおもふも、心もとなきに、ともし火かゝげたるこそまづうれしけれ。

四 驛

治まれる世はうまやぢの行きかひもにぎはしく、人やどす家はたたてつゞけて、草引きむすぶおもひもなき物からさすがに打つけてしもねられぬは、旅ぢのならひなるべし。晩のかねはいづこも同じひゞきにて、いととくたち出づるはたご馬の聲々、まくらが

和夜  
初夜  
夜學

みに聞えてこゝちよげなるに、けふはていけもよかんなり、なにがしの浦のながめいかに惜しからまし。かしこの御社にもこたひこそは。などいひつゝ、そゝきおくる音のほのかに聞ゆるは、あなたにねたる人なるべし。家なる人々もおきいで、朝げの事など、とくまかなひありくほど、やうく物さわがしくなりて、物になひゆく男どものひなうたうたふなど、いそがはしげにきこゆ。とばかりありて、門のもとに引きよせつゝ、馬まゐりて、さふらふ。といふは、わが乗るべきにやとおもふもいとをかし。

五 夜學

寺々のそや、鐘のひゞきもをさまりて、みな人もねたるに、いとうれしう、ともし火あかくしなして、文机に打むかひたるいみじう心すみて、ひる見たりしあたりのなにごゝろなくて、過ぎにしもおもひ

夜學  
初夜  
夜學

夜學  
初夜  
夜學



しられて、深きこゝろばへあるぐだりくも、おのづからときえら  
 るかし。かゝげつくしてもなほねぶたさもしらず、あぶらさしそ  
 へつゝ見もてゆくに、とほき世の人もたゞさしむかひかたらふこ  
 ちす。さうしつくりてをかきふしん、あるはふとおもひえ  
 たることなどをば、すみおしすりつゝ、かきつけなどするもをかし。  
 とりのこゑは、夜ふかきにやとおもふに、いとくあけはなれたる。  
 しばしとてうちねぶる夢のうちもあたしごとならんやは。

六 漁 邨

あまのすみかばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき海  
 べの風もたまらぬ松かげなどに、たゞかりそめにつくりたるわら  
 やどものさま、浪うちよせなば、やがてながれもうせぬべう、いとほ  
 かなげにみゆるを、繪にかきすさびたるなどは、なかくにをかき

きものから、さてすまひなばなにこゝちかせましと、おもひやるだ  
 にこゝろほそし。

夕つかたなど、年老いたるをのこの手からみしたるが、いそべに立  
 ちて、けふはいとおそくもあるかな。などといひつゝ、沖の方をま  
 ほりをり。うまこどもにやあらむ、まさごの上をはしりありきつ  
 つあそびるたるに、入日したる島かげより、みつふたつ歸りくる  
 舟の、かぢ引きをりてほこらしげなるを、老人まちえがほに打ちほ  
 ほゑみたるは、さちおほかりしにやと見ゆ。なぎさによせて、とび  
 おるゝまゝに、つなくりよせなどとかくしつゝのゝしるに、男も女  
 もあまた出てきて、おほきなる籠に魚どもとりいれつゝ、擔ひもて  
 行くさま、さはいへどにぎはゝしげなり。くゝつめく物もてきて、  
 ちひさき魚三四、こひもてゆくわらはなどもあり。すべて人多く  
 たちこみさわぎで、船のあたりかしがましく、さしよりてのぞくべ



うもあらず。いとながきあみの潜にかけほしたるをくりためて  
とりいれなどやうくしつまりゆけばこなたかなた火ともした  
るすきかげかべもあらはにていとあはれに見ゆ。

一夜やどりて見れば浪風のひまきまくらをゆすりてつゆまどろ  
まれず。曉がたと成りの家々めさましてなりはひのことどもな  
るべしあやしうきしらぬことどもをおのがじこわ高にいひ  
かはしたるげにあまのさへづりめづらしうもをかしうも。

七書

夏の日の暮れがたきを知らず冬の夜の永きをも覚えぬは書見る  
心の楽しさになんありける。さるは道々しきすぢのはさらなり  
家々に記せる何くれの文又かりそめの筆すさびなど唐大和古今  
と、いとさまざまおほかる中にわがたてたるすぢならぬも見もて

あやうき  
おろし  
あやうき  
おろし  
あやうき  
おろし

行くまゝにはえうあることどもありてかにかくに飽かずおもし  
ろくたのしきは書にしくものまたなかりけり。

遠き世の見るほどは我も其の世にある心地してやがて其の人  
々を友となしてうちかたらふ心地さへせらるゝを我も筆とりて  
よしなしごとども書きつるがたまくもちりほひ残りて後の世  
につたはらば今の古を見るが如く後の人はた我を友とせんには  
千とせの末にさへしる人ある心地していとをかしくなんおほゆ  
る。

萬の心やれるわざいとさはなれど唯ひとりゐてあかず楽しきは  
書の外に又何かはあらん。「あるが上にもあらまほしきは書なり  
けり。」と鈴屋の翁のいはれたるはげにさることにこそ。

鈴屋の翁  
本居宣長。



### 五 泊酒文藻

#### 一 琴後集序

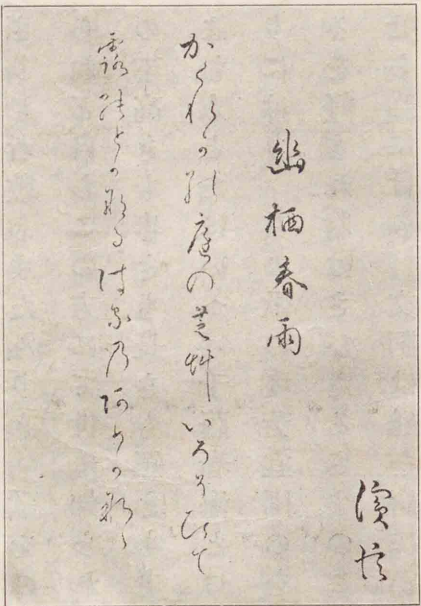
世に歌よむ人多し。或はみじか歌に巧に、或は長歌にかしこく、或は文書くわざにすぐる。世に古學する人多し。或は御代々々の書を明らめ、或は四つのおきて文に委しく、或はあがれる世のふることぶみに心を深め、或は後の世の物語書を枕ことゝす。其の人人に問へば、彼に委しきはこれにおろかに、此に思ひ入りたるはかしこに心淺し。しかのみならず、やまとざうしの上には口さきらきゝたるも、唐ぶみに向へば爪くはるゝ類多し。まことそれもことわり、誰やし人かは皆がらかね備へたるあらん。わが家の佛貴ぶにはなけれど、この道々に行通りて、萬づたどくしからぬは、獨

泊酒文藻  
清水濱臣の文集、四卷ある。濱臣は號を泊酒舎といひ、江戸の國學者で村田春海の門人、文政七年、四十九歳で歿した。

錦織の屋の翁  
村田春海の號。縣居の主人。加茂眞淵、國學四大人の一、明和六年歿、七十

服部仲英  
江戸の儒者、南郭の養子、詩に有名。明和四年歿、五十四歳。鵜殿士寧、幕府の旗本で儒者、安永三年歿、六十五歳。皆川伯恭、

洪園、京都の儒者、文化四年歿、七十四歳。安達文仲、名は修、下野の人、南郭の門人、寛政四年歿、六十七歳。



(蹟筆の臣濱水清)

り吾が師、錦織の屋の翁のみなんおはしける。翁こゝの事はすべて縣居の主人に問聞かれたるよし、誰も能く知れる事なればいはじ、唐學は、始め服部仲英ぬしに名簿おくられしを、仲英ぬし身まかられては、鵜殿士寧ぬしに従ひ、中頃都に上りて皆川伯恭ぬしに問ひきかれし事多く、又後には佐々木學儒、安達文仲などいへる世に勝れたる博士たちに、あしたゆうべ陸び伴はれし博士口あかすまでなんおはしける。翁世に求むる心なくして、やむごとなき御前わたりに召さるゝ事を好まれず、唯花にあくがれ月にうかるゝ外には、朝夕



千蔭  
橋千蔭、號を芳  
宜園といふ。江  
戸の歌人、文化  
五年歿、七十四  
歳。

文机のもと去らずおはして、筆執る業にのみ明し暮らされしが、ともすれば物學びする人の爲に妨げられ、かくすれば病の床に起臥して思ふ事いはて已まれたる事少からず、書きさして事終へられざりし者數あまたなりき。歌をのみたて、物せられしにはあらねど、自らこの方にて世に知られ、人に用ひられつゝ、やうく天の下高きも卑きも長きも短きも老いたるも若きも、知る知らぬ、歌よむ人とだにいへば、千蔭春海と口にいはざる者なきやうにはなりにけり。其の歌の姿、芳宜園のをぢは勢雄々しく、詞はなやぎたるを好まれ、翁はさびたるさまのこまかにしめやかなる節を心とせられにけり。文詞は趣を唐にかり、詞をこゝに移し、ふることを求めずさとし言を省き、新しく一つのさまを思ひ構へられて、わきてめてたくなん物せられける。世の人翁をたゞに歌よみと思はんも翁を知らぬなるべく、また唯に唐學の博士なみにのみ思はん

神功紀に云々  
則命武内宿禰  
令撫琴。喚中  
臣島賊津使主  
爲齋神者因以  
千繪高繪置琴  
頭後請曰云々  
(日本書紀卷九、  
神功皇后の章)  
この琴頭後をコ  
トガミコトジリ  
と讀む。

も翁を知らぬなるべし。翁若くしてなりはひの道に疎く、遂に家をはふらかして、百千の寶を失ひ、はては事足らぬがちに年月を送られしかど、老いて後言の葉に富み學に富まれたり。いてや百千の寶はたゞ暫し生けるが程の富なり。言の葉と學とは、とこしへに亡き跡までの富なり。翁寶に貧しくおはせしかど、言の葉と學とに富まれたり。誠に天の下の寶の玉とは、翁をぞいふべけれ、誰かは羨まざさん、誰かは慕はざらん。今この言の葉のふみ世に普く廣がりて、あひだおかず學の書とも板に彫られゆかば、吾が翁を天の下の寶の玉なりといふ事の詐ならぬ事知られつべし。そも此の集の名におふせられたる琴じりの詞は、神功紀に、琴がみ、琴じりといふ詞のあるより思ひよられたるなりとぞ。

二 萩をめづる詞



山上の國司  
萬葉集中の歌人  
山上憶良、靈龜  
中伯耆守とな  
る。天平五年歿、  
七十四歳。  
七種の歌  
秋の野に咲きた  
る花をおよびを  
りかき數ふれば  
七種の花。  
萩が花尾花葛花  
撫子の花女郎花  
また藤袴朝顔の  
花。(萬葉集)

木の花は春に匂を盡し、草の花は秋を時とすれば、誰も皆春は山邊をとめ、秋は野路にあくがるゝをこそ遊の道の常とはすれ。抑花野の秋に咲亂るゝ千草は、とをはたみそよそと、其の數多かめれど、是はしもと取出て、愛で弄ぶべきは、彼の山上の國司のよみ置かれたる七種に、なん盡きぬべき。そが中にも亦勝れたるは、何れとか定めん。女郎花はいとなまめかしく懐しげなれど、唐人もなにがしとか其の名をよびておとしめたるもことわり、花の盛なる程こそあれ、はてはうたてあやしき香のそひて、花瓶に入りたるなごりなどもあさましきまでに、鼻さへ打覆はるゝや。撫子は唐に倭に色を交へて美はしくあてなれど、常夏にうつろはずして、秋にまで咲きかゝれるが飽きたる方もあるべし。朝顔はいとらうたし。朝ごとに色改むるなど、心地清げなれど、これはまた見る程もなく萎れ渡りて、露のひるまを

古き歌にも云々  
人皆は萩を秋と  
いふよし吾はを  
花がうれを秋と  
はいはん。(萬葉  
集)

だに待たぬが事足らぬ心地する。葛は風のまに吹返す葉末のうら珍しさこそあれど、はひ廣ごりもうるさく、藤袴は匂のいひしらぬはさるものから、見立てなき花のさまならずや。尾花ぞ古き歌にも、秋とはいはん」と詠みたれば、あるが中にも優りたるやうなれど、廣き野末にめぢの限り高やかにさし靡きたるは、白妙の袖とも誤たれて心どまる心地すれど、二もと三もとが處せきつぼの内などに生ひたてらんは、何のをかきし節かあらん。いてや萩の花をみよ、秋の初風やうく、身にしみ渡る程より、かつく、咲きそめて、或はなだゝる大野ら、或は程なき前栽、多くも少くも、やごとなき御垣の下にも限らず、葎はふ賤がはひりをもきらはず、處えて匂ふさま懐しく、はためてたきに非ずや。さらば七種の内にも優るべく、千草の中にも勝れたるは、此の花をさしおきて又何れとかいはん。



三 擣衣を聞く

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむも又しきる。雁がねの聲の擣衣をさそふにやあらん、擣衣の音の雁がねにかよふにやあらん。あなあやしう。そもこの音の悲しきか、住む里のさびしきか、擣つをりのうきゆゑか、皆あらず聞く人の心のわびしきなり。

四 漁父辭

秋吹く風に耳欬て、故郷の鱸のなます思ひ出でけん人こそ、げにさる事とは覺ゆれ。岸の額に老の浪をたゝみて、直なる針に王公の位釣り得し翁はうらやましくもあらずや。我はたゞ世を捨舟に棹さして、山陰のしづけく、水草の清からんあたりに、息の緒のか

鱸のなます思ひ出でけん人  
吳人張翰、晉に仕へ、故郷の鱸を思出し官をすて、歸りし故事。  
王公の位を釣り得し翁  
太公望呂尚をさす。  
太公望之遇周文、渭濱之波磔面。(本朝文粹)

五 植村正路を哭す

あはれ悲しきかもや、萩の屋のぬし、あはれいたはしきかもや、植村のぬし。濱臣今申さん事あり、御魂、天がけりしても聞しめせ。ぬしは己が心知りの友なり。ぬしは己が歌學びの友なり。ぬしはおのが月花の友なり。ぬしはおのが酒みづきの友なり。ぬしとおのれと相知りそめて、今年まで二十年に過ぎたり。おのが友とする人だちすべて幾百たり、あるが中に年久しく、あるが中に隔てなく、あるが中に學にけうあり、あるが中に歌にたけたり、あるが中にまぬ人なり、あるが中にみやび人なり。ぬし歌よむ事をたしむ。おのれまたたしむ。おのれ古學びに心を深む。ぬし亦心を深む。ぬし酒飲む。おのれまた飲む。おの

植村正路  
橋千蔭の門人、  
文化十四年歿、  
四十六歳。



れ月花にあくがるくせあり。ぬしまたこの癖あり。ぬし手か  
くわざをよくす。おのれはよくせず。おのれは天の下のいたづ  
ら人にて、海山の歌枕を樂とす。ぬしはおほやけ人の數に入りた  
れば身を心に任せず。只この二つのみなんひとしからざりける。  
大方心合へるどちも、住み家程隔てたるは思ふがまゝに睦びかは  
す事なし。ぬしおのれと住家只はひわたる程なり。大方心あへ  
るどちも、齡いたく違へれば、隔つとなしに心おかるゝものなり。  
ぬしは四とせのこのかみなり。己は四とせのおとゝなり。か  
れば學の道にもはらから遊びたはれたる方にもはらからと親し  
みつゝ、晨に訪ひ夕べに訪はれつゝ、類なき睦びかたきなりき。  
此の近き年頃となりては、ぬしもおのれもうひまなびどもの道し  
るべする業に暇なくて、晨ゆふべに訪ひ訪はるゝ事自ら間遠にな  
りもて行きにたれど、猶ことゝある時は、夜中曉といはず、古書に疑

はしき事あれば問ひおこされ、古歌どもの中にいぶかしき節をば  
聞えかはしつゝ、なん有りける。

さるにぬし去年の冬よりそこはかとなくいたづきそめられて、今  
年の春聊かおこたりざまに見えしを、遂に夏の半にはかなくも身  
まかられぬ。あはれ悲しきかもや萩の屋のぬし、あはれいたはし  
きかもや植村のぬし。ぬし今老い人を残し、うち君を残し、むすめ  
子たち四人を残して身まかられぬ。先だつぬしの心、後るゝ人々  
のかなしみ、取集めて思ひやるにたへ難し。ぬしはらからおはせ  
ず、おのれ心の中にはらからのかなしみを盡さんとす。心のか  
しみを盡すは花を手向くるにあらず、香を焼くにあらず。心のか  
なしみを盡すは只言の葉にあり。其の言の葉は、巧を求むるにあ  
らず、飾を旨とするに非ず、只真心をのべ盡すにあるべし。かれ魂  
床の前にうつ伏しにして、誅言申すことしかく。



六 筆の跡を見てなき人をしのぶ

此の夏は、例よりも照りはたゞきて、いと堪へがたければ何くれとなすべきわざもうちおきて、門守る犬のやうに喘ぎのみ暮しぬるを、いつしか秋風のそよと耳驚かすに、徒にかくてのみやはとて、ひぢ近なる厨子どもより始めて、塗籠の書ら敷の限り引廣げて、日に曝し風入るゝに、塵箱の底にこめられてしみといふ蟲の住みかとなりにし反古どものいと多かるを、かゝる序に一つ二つととりつつ開き見るに、早くより睦びかはしたる友垣の言の葉どもの中を、およびを折りて其の人彼の人と數ふれば、半は泉に歸すとうちうめかるゝ中には、此の頃まで花にとひ月に向ひし萩の屋のあるじのなん、わきて數多く見出でたる。昨日まではありのすさびに見棄てたりしを、今よりは千とせのかたみと思ふに、そゞろうちまも

半は泉に歸す  
往事渺茫都似  
夢、舊遊零落半  
歸泉。(白氏文集)  
萩の屋のあるじ  
植村正路。

られて流れ落つる涙の、水莖の跡にそゞぎそふる心地すれば、

残れとて残しも置かぬ筆の跡を

形見と知らて形見とぞみる

いでや光異なる玉の聲は、うづもれぬ名と共に後の世までも聞えて傳はらんものから。

七 縣居翁の墓參會に

おのれ人に異なる一つの癖ありて常に夢みる事をおもしろみ、夢見る事を樂しむ。しかはあれど、よき夢見たりとて人に誇り語らんととも思はず、悪しき夢見しとて夢ときにあはせて物にかへうつさんともせず。おもしろむしるしにや、ぬる夜として夢見ぬ夜なく、樂しむからにや、はかなき事らも能く心の底に覺えて忘れず。如何なればおもしろく如何なれば樂しきぞといふに、夢といふも



のは思ふ心より見るとはいへど、いとゆくりなき事をのみ見て、思はぬ野山にもさまよひ、知らぬ昔人ともむつ物語し、或はをかき事、或はおそろしき事、或は苦しき事、昔かと思へば、今かと思へば、むかし、げにうつゝなきものになんある。さはいへ、夢といふもの絶えてなからましかば、よるは只徒にいねたるのみにして、ひたすらに死せるに等しかりなまし。よしやはかなき夢心地にもせよ、是を見て忘れず、是を見て樂しまば、いねし程も起きゐたらん心地して、五十年の命も百年の齡に思ひ比べられぬべし。徒に死せるが如きに勝らじやは。己が夢好みは、こゝに思ふ心ありての事なりけり。まことや、いにし世を忍び過行ける昔を思出づれば、すべて何かは夢ならぬ。悔しく過ぎし昔語は、取返さんにもよしなく、語り出でんもやくなき事ながら、己いと若くて、廿に三つ四つたらぬ程より、錦織の屋のあやなる手振に思ひをかけ、芳宜園の色なる

この御寺  
品川の東海寺。

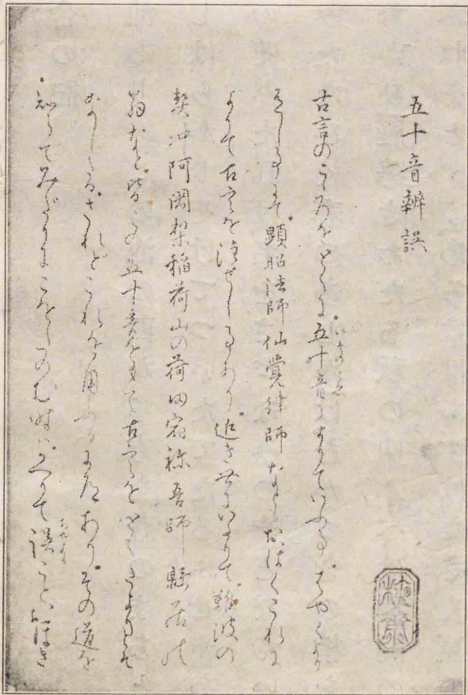
言の葉を心に染めて、晨夕に馴睦び聞えて、古事學フルゴトマダヒの事ら問ひものしたるに、二人のうしたち、常にともしれば、縣居の翁の世にいまそかりし折の事ども、打語り聞かせられて、萬づたゞ夢のやうに覺ゆるは。など慕ひ聞えられしが、其の二人のうし達も今は世におはせずして、その語り聞かされし折の事らも、また五年十年の昔語となりけり。おのれ才拙く、心たましひたゞはしからで、學の常に愚なれども、幸に二人の大人たちになれ親しみて、翁の昔語を聞けり。其の翁の昔語を耳に留め、二人の大人たちの世にいまそかりし晨夕を目に忘れずしあれば、翁のとありし節、二人の大人たちのかゝりしすさみを、事に觸れては思ひ出で、かつ慕ひかつ懐しむ。これ亦面白く樂しき夢物語ならずや。あはれ今この御寺に、翁のおくつき詣するも、年毎の恆例のやうになりてとゞせ餘り四年にもなりぬ。星移り月變らば、今も亦後の世の夢物語となりなまし。







へておもひをやり、またもろこしぶりのしらべにならひて心をも  
 なくさめけり。かれたまあへるひとく、花にあくがれ月にたど  
 るも、つねにこのふせやをなん訪ひ來にける。一日あるじのいひ  
 けらく、世を經てたえ  
 ざるものは鳥のあと  
 なり。いで此の屋の  
 たのしみをも、人々と  
 あひむつばへるこゝ  
 ろをも、ながくうみの  
 子のつぎくにつた  
 へて、わが名代とせん。  
 ことのゆゑよししるしてよ。」とあれば、すなはち筆さしぬらして、  
 いさゝかも、のはしにかきつく。



村田春海の筆蹟

二 知足庵の記

あはれ世のならはしこそはかなきものはあなれ。たかきいやし  
 き品いとことなりといへども、おのがじゝこゝろゆくばかりなる  
 はまれにて、たゞたらはぬ事のみぞおほかりける。花を思ふとて  
 は梢のあらしをうらみ、月をめづるとては尾上の雲をいとふため  
 し、誰かはこのがるべき。林に宿るさゝぎは僅なるさ枝のかげをの  
 みたのみ、ながれに水もとむるねずみは唯渴をとむるにすぎず。  
 とこそ、いにしへ人もいひつれ。かゝることわりをだにわかたば、  
 かぎりあるこの世に、かぎりなき事をおもふべきかは。こゝに中  
 村のぬしなん、よく塵の世のけがしきをのがれて、萱の軒松のとほ  
 そにこゝろの月をすましめ、花をつむゆふべ、あかをくむあかつき  
 みほとけにつかふるいとまある時は、氷をくだき雪をにて、梅の尾

林に宿る云々  
 鷓鴣巢 深林不  
 過一枝、偃風飲  
 河不過滿腹  
 (莊子)

梅の尾の昔云々  
 京都梅尾の明慧  
 上人が僧榮西か  
 ら茶の種を得て  
 梅尾に植ゑた事  
 からいつたので  
 ある。



の昔をしのぶめる業にしも心をなんなくさめける。これや此の  
 世にもとむべきすぢをもわすれ、また人をうらやむべきふしをも  
 おもはて、おのが心から事足る業にしもあれば、かのいにしへ人の  
 いひけんことわりにこそかなはめ。いてやうつそみの世のかぎ  
 りなきもとめあるきはとは、日をならべてあげつらふべくもあら  
 ざりけり。うべなく、このすみかをしも、たることをしるとは名  
 づけしこと。

三 隨時樓の記

うつせみの世の人のことわざ、よろづにさまぐなれど、時にそむ  
 き折にあはで、つきしからざらんはいみじきふしなりとも、い  
 かてこゝろのゆくわざなるべき。されば夏の日は埋火のあた、  
 かなるを思はず、冬の夜にひみつのすゞしさをばわすれつべし。

いにしへの人  
 清少納言。枕草  
 子の、すさまじ  
 きものといふ項  
 にこの事を書い  
 てゐる。

いにしへの人も、春のあじろ、八月のしらがさねをこそ、すさまじき  
 ことのためしには引きいてたりけれ。かゝればはかなきすさま  
 じも、折にあひたるはをかしく、見どころなき木草も、時を得たるはめ  
 づらかなんおほゆめる。しかはあれど、人ぐさしげきちまたの、  
 ところせく門たちならべたらんあたりには、時をすぐし、をりを失  
 ふたぐひ多くて、月にたよりよきは花にうとく、水によしあるは山  
 はるかにて、四つの時のゆきめぐるに随ひて心をやるべきすまひ  
 は、いとものかたしや。こゝに前田のぬしの高どのこそ、あやし  
 く所得てはおほゆれ。しりへは市路につぐくものから、まへは世  
 ばなれたるのぞみあり。春はむかつをの花のかをりを居ながら  
 たもとにしめ、夏はみなぎは清き池のはちすばを舟なちずして手  
 をり、秋は月にうそぶき、冬は雪にうたふも、すべてやま水のあはれ  
 をそへざるをりなんあらざりける。ましてあるじの言の葉もて



聞中大徳  
傳不詳、琴後集  
に聞中上人を送  
る序がある。

こてふにも似ぬ  
云々

月夜よし夜よし  
と人に告げやら  
ば来てふに似た  
り待たずしもあ  
らず。(古今集)

よるの錦  
富貴不歸故郷  
如衣錦夜行  
(漢書)

友にまじらふこと廣ければ、時にふれをりをすごさず訪ひくる人  
人、皆みやび好まざるはなし。かくとこしへにあくよもしらぬ高  
どのなればとて、聞中大徳のことさらに、時にしたがふてふことを  
もて名づけられたるは、ふかきころしらひにこそありけらし。

四 くもる秋の月を見る記

芳宜園の月のまとあは、年ごとのちぎりなれば、こてふにも似ぬ夜  
のさまなれど、こよひも例の人々まうて來にけり。さるはふりく  
らしたる雨の名残は、れゆかん空もおぼえず、ましてさやけき光ま  
ちいでんは、いと心もとなきを、更けゆかばかくのみにあらじ  
を、こよひはねであかしてまし。などいひつゝ、いやすむなしうか  
らげて、そとのみうちまもらるゝもいとわりなしや。今宵は名に  
おふ園生の花も、いたづらによるの錦にて、淺茅のものと松蟲のみ、

やうく、聲そはりゆくも、猶あかぬわざながら、さすがにあはれは  
そへつべし。

○ はれまなき月をいかにといひくゝて  
そらながめにや今宵あかさむ

○ かきくらす雲間の影はうとくとも  
月まつ蟲よせめてかたらへ

五 雪をめぐる記

かきかぞふ四つの時につけて、むらぎもの心をやるわざなん多か  
る中に、花をあはれみ月にあくがれ、雪をよろこぶ、三つのならはし  
こそ世にたぐひなきすさみとはすめれ。ことさへくから人のた  
めしにも、しきしまの大和の國ぶりにも、たかきもいやしきもへだ  
つる事なく、いにしへより今にかよはして、こを歌にによび、文にし



大切

○

るしてめであへるは、いづれをおとれりとも、いづれをまされりとも、品さだむべきたぐひならぬは、もとよりあげつらふべきことならねど、人によりて、おのがじ、心の引くかたなくてやはあらん。梓弓春のあした、うらくとひもときそむる花の心をとはんには、まづかしこの野づかさこの山里霞をしのぎ岩ほをたどりて、名ぐはしき陰をもとめてこそ、たぐひなきにほひをも見るべけれ。おどろなる垣ほのうち、あやしきふせやの前に、一本ふた木を移しうゑたらんは、なかくに花のおもてをぞふせつべき。また眞萩さく秋のさかり、くまなき月の光は、所をわかねど、あるは高殿の簾をからげて、千里の空をのぞみ、あるは行く河のながれにうかびて水底の影をもてあそびてこそ、心の雲もはるくべけれ。小家しみに立ちならび、はたばりなきはひりの庭に、うづくまりゐてみんには、塵あくだけか、しきも、澄みわたる光にいよゝあらはれ行きて、

かへりては月うとかれとぞおほゆめれ。かれば月と花とは、所がらこそあはれもうちそはるめれ。さるはかたる翁がたぐひのしづたまき品賤くして、うつゆふのさく苦しきすみかにかきこもり居つゝ、くさつゝみやもひにのみかゝづらふ身は、かの高殿の望舟やかたのすさみは、いかでかおもひもかけん。又野山の遊も、おのづから時におくれ、をりを過して、常に心にそむくふしなんおほかめる。かれ雪ばかりは、此の二つにことなり、むぐらにとぢたる門のうちも、たゞ一夜のからに玉しく庭とうつろひ、あばらなる板屋が軒も、時の間に白がねをはやせるばかりに、すがたをかへもて行きて、あしたゆふべのいぶせさもさらにおほえず。まためなれたる市のちまたも、たちまちに景色をそへて、いひしらぬ山里のおもひをなし、ゆきかふあき人の蓑笠までも見所ありと覚え、はかなき木草、よろづのものも、さながらめづらかなりとのみめとゞめら



る。たゞ居ながらにして境をうつし、所をかふるとやいふべからん。かくてこそ心にたらはぬことなく、ほかに羨むべきふしもあらね。されば此の雪にのみ翁が心をよするも、所にしたがひ人によりたる、老のすさみなるはや。

六 上田秋成がもとへ

春たちかへるのどけさは、わきて都の空こそゆかしう侍れ。今はいはほの中なるすまひをふりすて給ひて、巷の花柳にたちまちらひ給ふらんは、いかに心ゆく御すみかならまし。

すどもれる谷の鶯いかなれば

都のはるに心ひかれし

となん聞えまほしき。されどき世の塵ののがれがたかなるも、猶市のうちに隠れけん、古人のためしにならひ給ふべければ、世の

上田秋成

次に採録した雨月物語の著者。奇人で屢々住處を變へた一の號を鶯居とつけ、自ら之を説明して、鶯は常居なしの意をとつたものだといつてゐる。嘗て攝津の長柄に住み次で京都に移つた。此の手紙はその時のものであらう。

市のうちに隠れ

けん古人

小隱隱(陵藪、大隱隱)朝市。(王康珞)

さがしらぬ人々とのみ、みやびかはし給ふらんは、山住のつれづれならんよりはと、おし計りまゐらすものから、いたづらに千里のよそにありて、萬まのあたり聞え承らぬこそあかぬわざなれ。さはいへ、雁の翅の行きかひだに絶えずば、中々に遠くて近きたぐひとや思ひなぐさみ侍らん。柳の絲のくりかへしつゝ、今年もとだえなく聞えまゐらせばやと思ふを、ゆめ鶯の鳴く音をしみたまひそ。

七 月花のあはれをことわる詞

花をめぐらしみ月をあはれむならはしなん、流れての世はさらなる、其のみなもとを考ふるに、いとしも上つ代よりぞ起りにける。花に心を慰めませしは、稚櫻の宮にはじまり、月を言の葉にかけ給へるは、朝倉の宮よりなん聞えたる。しかありて後、藤原奈良の御

稚櫻の宮

履仲天皇の皇居

朝倉の宮

雄略天皇の皇居

藤原の御世

持統天皇の御代

奈良の御世

元明天皇から光仁天皇まで七代



物おもひなき春を云々

年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし。

(古今集)

加はる老を云々

大方は月をもめてこれぞこのつもれば人の老となるもの。(古今集)

花の命を云々

櫻町中納言藤原成範が櫻の早く散るを惜んで天照大神に咲きのびる事を祈つたといふ故事。

月のゆくへを云云

月かげは入る山の端もつらかりき絶えぬ光を見るよしもがな。(新勅撰集)

世にいたりては、歌人おほくいで来て、かたみにみやびをかはし、ころ／＼に思ひをのぶる事、皆月花をもて心の種とぞなしたりける。かくて世のうつるにしたがひて、此のすさみいよくさかりになりもてゆきて、あるは物おもひなき春を花によろこび、加はる老を月になげき、あるはさかしきもおろかなるも、たよりなき所にはなをたづね、しるべなきやみに月をたどり、あるは花の命を神にいのり、月のゆくへを佛にちぎり、またしもがしもなる薪こる山がついぶせきふせやのしづのめまでも、月と花とに心をよせざるなんあらざりけらし。さるはかけまくもかしこきおほみあそびのきはことなるか中にも、月と花とのためには、時にのぞみて、ことさらうたげのむしろをまうけ給ふ事おきてたがはず、のどかなる御世のためしにさへなり來にけり。かくさま／＼なるよ／＼のあとを見るに、いにしへも今も尊きもみじかきも、月と花とをうむが

しみおもへる事ひとしくて、いづれをあまれりとし、いづれをたらずとして、一かたにこゝろよせたる人たれかはあらん。しかるを今にありて、其のよしあしをことわりいはんは、人わらへにもなりぬべし。しかはあれど、これをことわるにゆゑあり。そのおとりまさりは、もとよりかれにはあらざれど、おのがじ／＼うち見る人の身にたぐへ思はんには、其のよるかたいかでかなからん。抑も花は春にありてにぎは／＼しきにより、月は秋にありてかなしみをぞ起すなる。今このくち翁が心にとりていはゞ、身すでに老にたれば、つぼめる花のさかりまちいでんたのしみもなく、品いやしければ、花々しき世をへて時にかをらんねがひもかけず、たゞ鏡にうちむかふをりしも、かしらの霜をみては月の影かとおどろき、かたぶくよはひをおもひては、入かたの月ぞ身によそへつべき、かれば花にはおのづからにうとく、月にぞ心のひかれける。さはいへ、



こはわが身ひとつのすさみなり、おほよそ人のためには、いかでか  
まねびもいでん。

雨月物語

上田秋成の著、怪異なる短篇小説數篇を集めたもの。秋成は大阪の人で、後に京都に住む。國文學に關する著書の外に小説・隨筆等がある。文化六年歿、七十八歳。  
藤篋冊子  
同じく秋成の著。六卷ある。秋成の歌文集。  
延長  
醍醐天皇の時の年號。  
三井寺  
園城寺のこと。大津町の西北にある。

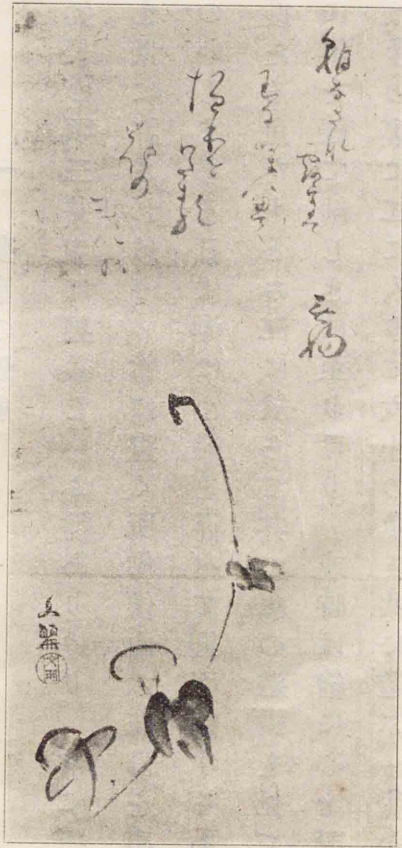
七 雨月物語と藤篋冊子

一 夢應の鯉魚

昔延長の頃、三井寺に興義といふ僧ありけり。繪に巧なるをもて、名を世に許されけり。常に畫く所、佛像・山水・花鳥を事とせず。寺務のいとまある日は湖に小船を浮べて、網引釣するあまに錢を與へ、獲たる魚をもとの江に放ちて、其の魚の遊ぶを見ては畫きける程に、年を経て精しきに至りけり。或時は繪に心を凝して眠を誘へば、夢の裏に江に入りて大小の魚と共に遊ぶ。覺むればやがて見つるまゝを畫きて壁におし、自ら呼びて夢應の鯉魚と名付けけり。その繪の妙なるをめてて、乞要むる者前後を争へば、只、花鳥・山水は乞ふに任せて與へ、鯉魚の繪はあながちに惜みて、人ごとに戲



れていふ、生を殺し鮮を喰ふ凡俗の人に、法師の養ふ魚必ずしも與へず。」となん。其の繪と俳諧と、共に天下に聞えけり。一年病に罹りて七日を経て忽に眼を閉ぢ、息絶えて空しくなりぬ。



(蹟筆の成秋田上)

徒弟友どち集りて、歎き惜みけるが、只胸のあたりの少し暖なるにぞ、もしやと居めぐりて守りつも、三日を經にけるに手足すこし動き出づるやうなりしが、忽ち溜息を吐きて眼をひらき、醒めたるが

如くに起きあがりて、人々にむかひ、我、人事をわすれて既に久しき日をか過しけん。」衆弟等いふ、師三日前に息たえ給ひぬ。寺中の人々をはじめ、日頃睦じくかたり給ふ殿ばらも詣てたまひて、葬の事をも計りたまひぬれど、只師が胸の暖なるを見て、柩にも藏めてかく守り侍りしに、今や蘇生りたまふにつきて、かしこくも物せざりしよと怡びあへり。」興義點頭きていふ、誰にもあれ、一人檀家の平の助の殿の館に詣りて、申さんは『法師こそ不思議に生きはべれ。君今酒を酌み、鮮けき繪をつくらしめたまふ。しばらく宴を罷めて寺に詣でさせたまへ。稀有の物語聞えまゐらせん。』とて彼の人々のある形を見よ。我が詞に露たがはじ。」といふ。使異みながら彼の館に往きて其の由をいひ入れてうかゞひ見るに、主の助を初め、弟の十郎、家の子掃守など居めぐりて酒を酌みたる、師が詞のたがはぬを奇とす。彼の館の人々此のことを聞き



て大に異み、先づ箸を止めて十郎掃守をも召具して寺に到る。興義枕をあげて、路次の勞をかたじけなうすれば、助も蘇生の賀を述べ。興義先づ問うていふ、君試に我がいふ事を聞かせたまへ。かの漁父文四に魚をあつらへ給ふことありや。助驚きて、まことにさることあり。いかにしてしらせたまふや。興義かの漁父三尺あまりの魚を籠に入れて君が門に入る。君は賢弟と南面の所に碁を圍みておはす。掃守傍に侍りて桃の實の大なるを啗ひつゝ、突の手段を見る。漁父が大魚を携へ來るを喜びて、高坏に盛りたる桃をあたへ、又杯をたまうて三獻飲ましめたまふ。鱒手したり顔に魚をとり出でて鱒にせしまで、法師がいふ所たがはでこそあるらめ。といふに、助の人々此の事を聞きて、或は異み或はこゝち惑ひて、かくつばらなる言のよしを頻にたづぬるに、興義かたりていふ、我此の頃病に苦しみて堪へがたきあまり、其の死したるをも

しらず、熱きこゝちすこし冷さんものと、杖に扶けられて門を出づれば、病もやゝ忘れたるやうにて、籠の鳥の雲井にかへるこゝちす。山となく里となく、行き行きて又江の畔に出づ。湖水の碧なるを見るより、現なき心に、浴びて遊びなんとて、そこに衣を脱ぎすて、身を跳らして深きに飛入りつゝも、をちこちに遊びめぐるに幼きより水に狎れたるにもあらぬが、思ふにまかせて戯れけり。今思へば愚なる夢ごゝろなりし。されども人の水に浮ぶは、魚のこころよきにはしかず。こゝにて又魚の遊を羨むこゝろおこりぬ。傍にひとつの大魚ありていふ。『師のねがふ事いとやすし。待たせたまへ。』とて、はるか底にゆくと見しに、しばしして冠裝束したる人の、前の大魚に跨りて許多のうろくづを率ゐて浮びきたり、我にむかひていふ、『わたつみの詔あり。老僧かねて放生の功德多し。今江に入りて魚のあそびをねがふ。權に金鯉が服を授け



長等の山 近江國滋賀郡。三井寺の西方にそびえる山。  
 志賀の大曲 同郡にある入江。又輪田ともいふ。滋賀の都の時の渡津である。  
 比良の高山 同郡に屬し、木戸・小松二村の西に横はる。  
 堅田 琵琶湖の西岸にある。  
 夜中の鴻 近江高島郡にあつたものらしい。萬葉集の歌に見えてゐる。  
 鏡の山 蒲生郡にある山。三上山の西にならぶ。  
 八十の湊 今の犬上郡磯田村の大字八坂の古名。右は廻船が寄泊した。

て、水府のたのしみをせさせ給ふ、只餌の香しきに味まされて、釣の絲にかゝり身を亡ふことなかれ。』といひて、去りて見えざるにぬ。不思議のあまりに、おのが身をかへり見れば、いつのまにか鱗金光を備へてひとつの鯉魚と化しぬ。あやしとも思はて、尾を振り鱗を動かして心のまゝに逍遙す。まづ長等の山おろし、立ちゐる浪に身をのせて、志賀の大曲の汀に遊べば、かち人の裳のすそぬらすゆきかひに驚かされて、比良の高山影うつる深き水底に潜くとすれど、かくれ堅田の漁火によるぞうつなき。ぬば玉の夜中の鴻にやどる月は、鏡の山の峰に清みて、八十の湊の八十隈もなくておもしろ。沖津島山竹生島波にうつろふ朱の垣こそおどろかるれ。さしも伊吹の山風に朝妻船の漕出づれば、葦間の夢さまされ、矢橋の渡する人の水なれ棹をのがれては、勢田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日あたゝかなれば浮び、風あらきときは千尋の

沖津島山 琵琶湖中にある沖之島。島中に奥津島神社がある。  
 竹生島 琵琶湖中の有名な島。都久夫須磨神社がある。  
 伊吹山 近江國坂田郡に在る山。  
 矢橋 近江國栗太郡にある村。  
 勢田の橋 琵琶湖の水が勢田川となつて流れ出る處の橋。

底に遊ぶ。急にも飢ゑてもほしげなるに、をちこちらにあさり得ずして狂ひゆくほどに、忽ち文四が釣を垂るゝにあふ。その餌はなはだ香し。心又わたつみの戒を守りて思ふ。我は佛の御弟子なり。しばし食を求め得ずとも、なぞもあさましく魚の餌を飲むべきとて其所を去る。しばしありて飢ますく、甚しければ、かさねて思ふに、『今は堪へがたし。たとひ此の餌を飲むとも、をこに捕られんやは。もとより彼は相識るものなれば、何のはかりかあらん。』とて、遂に餌をのむ。文四早く絲を収めて我を捕ふ。『こはいかにするぞ。』と叫びぬれども、彼かつて聞かず顔にもてなし、て繩をもて我が腮を貫き、葦間に船を繋ぎ、我を籠に押入れて君が門に進み入る。君は賢弟と南面の間に突して遊ばせたまふ。掃守傍に侍りて木の實を啗ふ。文四がもて來し大魚を見て、人々大に感てさせたまふ。我其のとき人々にむかひ、聲をはり上げて、『か



たゞ等は興義をわすれたまふか。宥させたまへ。寺にかへさせたまへ。』としきりに叫びぬれど、人々しらぬさまにもなして、只手を拍つて喜びたまふ。繪手なるもの、まづ我が兩眼を左手の指にてつよくとらへ、右手に礪ぎすませし刀をとりて、俎盤にのぼし、既に切るべかりしとき、我くるしさのあまりに大聲をあげて、『佛弟子を害する例やある。我を助けよ、助けよ。』となき叫びぬれど、聞入れず。終に切らるゝとおぼえて夢醒めたり。』とかたる。人々大いにめであやしみ、師が物がたりにつきて思ふに、其の度ごとに魚の口の動くを見れど、更に聲を出す事なし。かゝる事まのあたりに見しこそいと不思議なれ。』とて、従者を家に走らしめて、残れる鱸を湖に捨てさせけり。

興義これより病癒えて、はるかの後、天年をもてまかりける。其の終焉に臨みて、畫く所の鯉魚數枚をとりて湖に散らせば、畫ける魚

閑院の殿

京都二條の南、西洞院の西に地を占めた邸。初め藤原冬嗣の邸として造られたが、後には皇居となつた事もある。

古き物がたり  
古今著聞集。

加古の驛

加古郡加古川町、中國街道の一驛であつた。

紙繭をはなれて水に遊戯す。こゝをもて興義が繪世に傳はらず、その弟子成光なるもの、興義が神妙をつたへて時に名あり。閑院の殿の障子に鶏を畫きしに、生ける鶏この繪を見て、蹴たるよしを、古き物がたりに載せたり、(雨月物語)

二 菊花の約

播磨の國加古の驛に、丈部左門といふ博士あり。清貧をあまなひて、友とする書の外はすべて調度の煩しきを厭ふ。老母あり。孟氏の操に譲らず。常に紡績を事として、左門がこゝろざしを助く。其妹なるものは、同じ里の佐用氏に養はる。此佐用が家は頗富み榮えて有りけるが、丈部母子の賢きを慕ひ、娘子を娶りて親族となり、屢々事に托せて物を贈るといへども、口腹の爲に人を累さんやとて、敢へて承くることなし。



一日左門同じ里の何某が許に訪ひて、いにしへ今の物語して、興ある時に壁を隔て、人の苦しむ聲いとも哀れに聞えければ、主に尋ぬるに、主答ふ。「これより西の國の人と見ゆるが、伴ひに後れしよしにて一宿を求めらるゝに、士家の風ありて卑しからぬと見しままに、留め參らせしに、其夜邪熱劇しく、起臥も自はまかせられぬをいとほしさに、三四日を過しぬれど、何地の人ともさだかならぬに、主も思ひがけぬ過し出で、心地惑ひ侍りぬといふ。左門聞きて、「悲しき物語にこそ。主の心安からぬもさる事にしあれど、病苦の人は、しるべなき旅の空に、此疾を憂へ給ふは、わきて胸苦しくおはずべし。其やうをも看ばや。」といふを、主とゞめて、瘧病は人を過つ物と聞ゆるから、童部らもあへてかしこに行かしめず。立ちよりて身を害し給ふこと勿れ。」左門笑うていふ、死生命あり。何の病か人に傳ふべき、これらは愚俗のことばにて吾們はとらず。」と

死生命あり  
死生有命、富貴  
在天。(論語)

て、戸を推して入りつゝも、其人を見るに、主が語りしに違はて、並の人にはあらじを、病深きと見えて、面は黄に、肌黒く瘦せ、古き衾のうへに悶え臥す。人なつかしげに左門を見て、湯一つ恵み給へ。」といふ。左門近くよりて、士憂ひ給ふこと勿れ、必救ひ參らすべしとて、主と計りて、藥をえらみ、自ら方を案じ、みづから煮て與へつゝも、猶粥をすゝめて病を看ること、同胞の如く、まことに捨て難き有様なり。かの武士、左門が愛憐の厚きに涙を流して、かくまで漂客を恵み給ふ、死すとも御心に報い奉らんといふ。左門諫めて、力なきことは、な聞えたまひそ。凡疫は日數あり、其程をすぎぬれば、壽命をあやまたず。吾日々に詣てて仕へ參らすべし」と、實やかに約りつゝも、心を用ひて助けゝるに、病やゝ減じて心地清しく覺えければ、主にも懇に詞をつくし、左門が陰徳を尊とみて、其生業をもたづね、己が身の上をも語りていふ、もと出雲の國松江の郷に人となりて、赤穴



富田 出雲能義郡。  
 鹽冶掃部介 京極持壽に屬し、三澤、三刀屋の諸族と尼子清定の居城富田城を攻陥れ、代はつて其の城主となる。  
 佐々木氏綱 高頼の子。近江の守。  
 尼子經久 清定の子。文明十八年富田城を奪還し出雲因幡伯耆隱岐等を略有し天文十年八十四で歿す。  
 山中黨 出雲の豪族。  
 三澤、三刀屋 出雲の豪族。三澤は三澤城主爲幸、三刀屋は彈正左衛門爲虎。

宗右衛門といふ者なるが、纔に兵書の旨を明らめしによりて、富田の城主鹽冶掃部介、吾を師として物學び給ひしに、近江の佐々木氏綱に密の使に選ばれて、かの館に留まるうち前の城主尼子經久、山中黨をかたらひて、大晦日の夜に城を乗りとりしかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて鹽冶は守護代なれば、三澤、三刀屋を助けて、經久を亡し給へと勸むれども、氏綱は外勇にして内怯えたる愚將なれば果さず、却て吾を國に留む。故なき所に永く居らじと、己が身一つを竊みて國に還る路に、此疾に罹りて、思懸ずも師を煩しむるは、身に餘りたる御恩にこそ。吾半世の命をもて、必報い奉らん。」左門いふ、見る所を忍びざるは、人たるもの、心なるべければ、厚き詞を納むるに故なし。猶留りていたはり給へ。」と、實ある詞を便にて、日頃經るまゝに物みな平生に近くぞなりにける。

此日頃、左門はよき友求めたりとて、日夜交りて物語するに、赤穴も諸子百家のことおろ／＼語り出で、問ひわきまふる心愚ならず、兵機のことわりはをさ／＼しく聞えければ、一つとして相共に違ふ心もなく、かつめて、かつ喜びて、終に兄弟の盟をなす。赤穴五歳長じたれば、兄たるべき禮儀ををさめて、左門に向ひていふ、吾父母に別れ參らせていとも久し。賢弟が老母はやがて吾母なればあらたに拜み奉らんことを願ふ。老母憐みてをさなき心を受け給はんや。」左門歡に堪へず、母なる者常に我が孤獨を憂ふ。信ある言を告げなば、齡も延びなんに。」と、伴ひて、家に歸る。老母喜び迎へて、吾子不才にて學ぶ所時にあはず、青雲の便を失ふ。願ふは捨てずして兄たる教を施し給へ。」赤穴拜していふ、大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず。吾いま母公の慈愛を蒙り、賢弟のぬやを納むる、何の望かこれに過ぐべき。」と、喜びうれしみつ



つ、又日來をとゞまりける。  
 きのふけふ咲きぬると見し尾上の花も散りはて、涼しき風による浪に、とはでもしるき夏の初になりぬ。赤穴、母子に向ひて、吾近江を遁れ來りしも、雲州の様子を見ん爲なれば、一たび下りて、やがて歸り來り、菽水のつぶねに御恩をかへし奉るべし。今の別れを給へ。」といふ。左門いふ、さあらばこのかみいつの時にか歸り給ふべき。赤穴いふ、月日は逝きやすし。おそくとも此秋は過さじ。左門いふ、秋はいつの日を定めて待つべきか。願ふは約し給へ。赤穴いふ、重陽の佳節をもて歸り來る日とすべし。左門いふ、このかみ必ず此の日を誤りたまふな。一枝の菊花に薄き酒を備へて待ち奉らん。」と、互に情をつくして赤穴は西に歸りけり。  
 新玉の月日早く經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊艶やかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも蚤く起き出で、草の屋の

牛窓  
 備前國邑久郡牛窓の港。  
 小豆島  
 讃岐にあり。瀬戸内海中の小島。  
 室津  
 播磨國揖生郡。

席をはらひ、黄菊白菊二枝三枝小瓶に挿し、囊を傾けて酒飯の設をす。老母いふ、かの八雲たつ國は山陰のはてにありて、こゝには百里を隔つるときけば、けふとも定め難きに、其來しを見てものすとも遅からじ。左門いふ、赤穴は信ある武士なれば必ず約を誤らじ。其人を見てあわたゞしからんは、思はんことの恥し。」とて、美酒を沽ひ鮮けき魚を煮て厨に備ふ。  
 此日や天晴れて、千里の雲の立居もなく、草枕旅ゆく人の群々語りゆくは、けふは誰某がよき京入なる。此度の商物によき徳とるべき祥になん。」とて過ぐ。五十あまりの武士、二十あまりの同じ出立なる、日和はかばかりよかりしものを。明石より船もとめなば、この朝びらきに、牛窓の門の泊は追ふべき。若き男はけく物おびえして、錢おほく費すことよ。」といふに、殿の上らせ給ふ時、小豆島より室津のわたりし給ふに、なまからきめにあはせ給ふを、從に侍



魚が橋  
播磨國印南郡阿  
彌陀村。

人の心の云々  
色かはる萩の下  
葉を見てもまづ  
人の心の秋ぞ知  
らるゝ。(新古今  
集)

りしものゝ語りしを思へば、このほとりの渡は、必ず怯ゆべし。な  
ふづくみたまひそ。魚が橋の蕎麥ソウマイ振舞申さんに。」といひ慰めて  
行く。口とる男の腹だゝしげに、此死馬は眼をもはだけぬか。」と、  
荷鞍おし直して追ひもて行く。  
午時トキもやゝ傾きぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に、宿り  
急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて心酔へ、  
るが如し。老母左門をよびて、人の心の秋には非ずとも、菊の色こ  
きはけふのみかは。歸り來る信だにあらば、空は時雨に移行くと  
も、何をか怨むべき。入りて臥しもして、又翌アスの日を待つべしとあ  
るに、否みがたく、母をすかして前に臥さしめ、もしやと戸の外に出  
て、見れば、銀河影消えんゝに、氷輪我のみを照して淋しきに、軒守  
る犬の吼ゆる聲澄渡り、浦波の音ぞこゝもとにたちくるやうなり。  
月の光も山の端に暗くなれば、今はとて戸をたてゝ入らんとする

に、たゞ見るおぼろなる黑影の中に人ありて、風のまにゝ、來るを  
怪しと見れば、赤穴宗右衛門なり。踊り上る心地して、小弟蚤くよ  
り待ちて今に至りぬる。盟たがはて來り給ふことのうれしさよ。  
いざ入らせたまへ。」といへど、只點頭きて物をもいはてぞある。左  
門前に進みて、南の窓の下に迎へ、座につかしめ、このかみ來り給ふ  
ことの遅かりしに、老母も待ちわびて翌アスこそと臥所に入らせたま  
ふ。寤させ參らせん。」といへるを、赤穴又頭を振りて止めつも、更  
に物をもいはてぞある。左門いふ、既に夜を續ぎて來し給ふに、心  
も倦み足も勞れ給ふべし。幸に一杯を酌みて休ませ給へ。」とて、  
酒をあたくめ、下物サカサを列ねて勸むるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、其の  
臭を嫌み避くるに似たり。左門いふ、井臼ツツの力はたもてなすに足  
らざれども、己が心なり。卑しみ給ふ事勿れ。」赤穴猶答へもせて、  
長き息をつきつゝ、暫ししていふ、賢弟が信あるあるじぶりを、など



いなむべきことわりやあらん。欺くに詞なければ、實をもて告ぐるなり。必しも怪しみ給ひそ。吾はうつせみの人にあらず。きたなき靈のかりに形を見えつるなり。」左門大いに驚きて、このかみ、何故にこの怪しきことを語り出で給ふや。更に夢とも覺え侍らず。」赤穴いふ、賢弟と別れて國に下りしが、國人大方經久が勢に服きて、鹽冶の恩を顧みる者なし。從弟なる赤穴丹治、富田の城にあるを訪ひしに、利害を説きて吾を經久に見えしむ。假に其詞を容れて、つらく、經久がなす所を見るに、萬夫の雄入に勝れ、よく士卒を習練すといへども、智を用ふるに狐疑の心多くして、腹心爪牙の家の子なし。ながく居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約あることを語りて去らんとすれば、經久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外に放たずして、遂に今日に至らしむ。此約に違ふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈めども遁る

るに方なし。昔の人のいふ。「人一日に千里をゆくこと能はず。魂よく一日に千里をもゆくと、此の理を思出でて自ら又に伏し今夜陰風に乗りてはるく、來り、菊花の約につく。此心を憐み給へ。」と言終はりて、泪わき出づるが如し。「今は永き別なり。只母公に事へ給へ。」とて、座を立つと見しが、かき消えて見えずなりにける。左門あはてとゞめんとすれば、陰風に眼くらみて行方をしらず。俯伏につまづき倒れたるまゝに、聲を放ちて大に哭く。老母目さめ、驚き立て、左門がある所を見れば、座上に酒瓶魚盛りたる皿どもあまた列べたるが中に臥倒れたるを、忙はしく扶け起して、いかにととへども、只聲を呑みて泣くく、さらに言なし。老母問うていふ、兄赤穴が約にたがふをうらむとならば、明日なんもし來るには言なからんものを。汝かくまでをさなくも愚なるか。」と、強く諫むるに、左門稍答へていふ、このかみ今夜菊花の約にわざ



牢裏に云々  
病人多夢醫、囚  
人多夢赦。(黄  
山谷)  
渴するもの云々  
病人多夢飲、饑  
人多夢食。(白  
氏文集)

わざ來る。酒肴をもて迎ふるに、再三辭み給うていふ。しかん、  
のやうにて約に背くが故に、自ら又に伏して、亡魂百里を來るとい  
ひて見えなくなりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚し奉れ。只々  
赦し給へ。」と潜然と突入るを、老母いふ、牢裏に繋がる人は夢にも  
赦さるゝを見、渴するものは夢に漿水を飲むといへり。汝も亦さ  
る類にやあらん。よく心を靜むべし。」とあれども、左門頭を揺り  
て、實に夢の正なきにあらず。このかみはこゝもとにこそありつ  
れ」と、又聲を擧げて哭倒る。老母も今は疑はず、相叫びて其夜は哭  
きあかしぬ。明くる日左門母を拜していふ。「吾幼きより身を翰  
墨に寄するといへども、國に忠義の聞なく、家に孝信を盡すこと能  
はず。徒に天地の間に生るゝのみ。このかみ赤穴は一生を信義  
のために終る。小弟けふより出雲に下り、せめては骨を藏めて信  
を全うせん。きみ御身を保ち給うて、暫くの暇を給ふべし。」老母

公叔座  
支那、戰國時代、  
魏の惠王の時の  
相。

いふ、吾兒かしこに去るとも、早く歸りて老が心を休めよ。永く留  
りてけふを久しき日となすこと勿れ。」左門いふ、生は浮きたる漚  
の如く、朝に夕に定め難くとも、やがて歸り參るべし」とて、泪を振う  
て家を出で、佐用氏にゆきて、老母の介抱を懇にあつらへ、出雲の國  
にまゐる路に、飢ゑて食を思はず、寒きに衣を忘れて、まどろめば、夢  
にも哭き明しつゝ、十日をへて富田の大城に到りぬ。まづ赤穴丹  
治が宅にゆきて、姓名をもていひ入るゝに、丹治迎請じて、翼ある物  
の告ぐるにあらで、いかにしらせ給ふべき。謂なし。」と、頻に問ひ  
もとむ。左門いふ、士たる者は富貴消息の事、共に論ずべからず。  
只信義をもて重しとす。兄宗右衛門一旦の約を重んじ、空しき魂  
の百里を來るに報いすとて、日夜を追うてこゝに下りしなり。わ  
が學ぶ所について士に尋ね參らすべき旨あり。願ふは明かに答  
へ給へかし。昔魏の公叔座病の牀にふしたるに、魏王自まうて、



商鞅  
衛の人。魏の公  
叔座に仕へた。  
座が死んで秦に  
仕へ大に用られ  
たが後讒にあ  
うて死んだ。

手をととりつも告ぐるは、『若し諱むべからずの事あらば誰をして社稷を守らしめんや。わがために教をのこせ。』とあるに、叔座いふ、『商鞅年少しといへども奇才あり、王もしこの人を用ひ給はずば、これを殺しても境を出すこと勿れ、他の國にゆかしめば、必ずも後の禍となるべし』と懇に教へて、又商鞅を私に招き、『吾汝を勸むれども王許さざる色あれば、用ひずばかへりて汝を害し給へと教ふ。是れ君を先にし臣を後にするなり。汝速く他の國に去りて害を免るべし。』といへり。この事と宗右衛門にたぐへてはいかに。丹治只頭を低れて言なし。左門座を進みて、兄宗右衛門鹽冶が舊交を思ひて、尼子に仕へざるは義士なり。士は舊主の鹽冶を捨て、尼子に降りしは士たる義なし。兄は菊花の約を重んじ、命を捨て、百里を來しは信ある極なり。士は今尼子に媚びて骨肉の人を苦しめ、此横死をなさしむるは友とする信なし。經久

強ひて留め給ふとも、舊しき交を思はゞ、私に商鞅叔座が信を盡すべきに、只榮利にのみ走りて、士家の風なきは即尼子の家風なるべし。さるから、このかみ何故この國に足を留むべき。吾今信義を重んじて、態々こゝに來る。汝は又不義の爲に汚名を遺せ。とて、いひも終らず拔打に切りつくれば、一刀にてそこに倒る。家子ども立騒ぐ間に、はやく逃れ出て、跡なし。尼子經久この由を傳へ聞きて、兄弟信義の篤きを憐れみ、左門が跡をも強ひて追はせざるとなり。(雨月物語)

三 十雨言

五日に一たび云々  
太平之世五日一  
風、十日一雨、  
風不鳴枝、雨  
不破塊。  
(論衡)

五日にひとたび風ふき、十日にひとたび雨ふると云ふ、聖の御代のためしにぞ云ふめるを、一年すぐる程のついでをしも見れば、陸月立ちて、人の心を春にあらたむるにはあらで、鶯の初音のおとづれ、



梅の南の枝に綻びそむるとこそ見れ、山々に霞かゝれるも夕づけて風さえ立ちまふ雲は猶冬の名残して、沫雪の梢どもにはつゝかゝれど、土に落ちては、つみがてになん見ゆるも、都邊は照日ながらに日毎うち散るを、山里いかならん、思ふもすゞろ寒けしや。そのほど過ぎにては、木の芽春雨けふいく日ふり次ぎて、野は古草に新草まじりて萌出づれば、四つの澤水もや、満ちぬべし。三吉野の花にとて旅たつ人の、あまぎぬ打ちかつきて、散りや過ぎなると、心あわたゞしく分登るそわりなき。またたれこめて籠りをる人は、春のものと眺めくらしつゝ、酒あたゝめさせ、友なき夕は、家刀自呼びいで、くみかはし、あそび敵とするこそ、よそめもいとたのしけれ。若きほどは、これを恥らふさまなるも、中々になまめかしき。山もはた、おそきもはやきも、嵐にさそはれて、櫻の花は散りつきぬべし。

四つの澤も云々  
春水節四澤  
(陶潛詩)

春のものと云々  
起きもせず寐も  
せず夜を明かし  
ては春のものと  
てながめ暮し  
つ。(伊勢物語)

夏あつの林はやしの緑きぬに染ぬめますに、夕ゆふをつぐる鐘かねの音ねさへ、打ちしめるばかりにふるは、袂たもとすゞしき初はつなりけり。垣根かきの卯うの花はなの雪ゆきならば、などや凋しぼみくたつらん。短夜みづかの月つきのあゆみいと疾はやきやうなるに、小雨こすめ打ちこぼしつゝ、ゆく雲くものかゝれるかと思おもひ見るに、時鳥ときどりの一聲ひとこゑ鳴捨なて、又遠方とほ方に二聲ふたこゑ三聲さんこゑかすかに聞きゆるも嬉うれし。田子たごの裳裾ももすそのひぢりこにそみつゝ、早苗はやなとりはやす、五月雨ごごのはれまのいそぎを、里さとつゞきに、何とやら唄うたひつるゝいと賑にぎはしな。やす川やすがはすゞか川がはなどの岸しらべのをちこちに、あすや晴はるゝと、心の外こゝろの外の旅たび寝ねする人ひといかにわびしからん。みな月立つきたちぬれば、峯雲たかねぐもの夕ゆふごとにたつも崩くづるゝも、天あまにますいづれの神かみのたくみならん。蟬せみなく木かげのやどり、汗あせをぬぐひ、岩間いわまの清水しみずを掬くびて、あかぬ人の、行き疲つかるゝさまなるに、風かぜさと吹ふきくる跡あとより、黒くろき雲くもの追おひしきて、降ふりくる村雨むらは瓶びんにたゝへし水を

やす川・いすゞ  
川

野洲川は鈴鹿峠に發して西北流して琵琶湖に入る。鈴鹿川は同じく鈴鹿峠に發して東北流して伊勢灣に注ぐ。何れも舊東海道の沿道にある。



くつがへすが如くに御格子おろせ、簾よなど立ちさうどきつ、見  
 たまへれば、大庭のしらまなごは、忽ち浅川の瀬に流れあひて、殿守  
 のとものみやつこらこゝかしこの御垣のくまぐまに這ひかくる  
 ゝなどいとめざましな。落ちたぎつ瀬の水上にはしらぬ濁のい  
 はほを越え、岸をくづしつゝ、みかさ増ると見しも、たゞ片時になが  
 れ落ちて、水陰草の露おもげに萎へふし靡きあひたる、今朝よりの  
 暑わするゝ夕なりけり。  
 初秋の空に横たはりて、星の契へだつてふかたり言は、唐土人のま  
 こと偽はしらねど、文に書き歌につくりてもてはやすを、こゝにも  
 ならの葉のはやき昔より雨ざはりやすと打ちまねび出でたるは  
 かなげなり。大方の年なみを見れば、夏秋のあひだは、山田澤田水  
 をそゝぎかねて、ことしの秋いかならんと、夜を晝につぎつゝ、男ら  
 立走り、池沼も小川も、淺はつるまでせきあぐるこの頃、空に乞ひ神

雨ざはり  
 雨ざはり常する  
 君は久方の昨日  
 の雨にこりにけ  
 んかも(萬葉集)

雨をよろこぶて  
 ふ文  
 蘇子瞻、喜雨亭  
 記。

に祈りつゝ、夜をいをねず、鐘つゞみの音里々とゞろきあひ、焼くか  
 りの火影はをちかた野邊の隈々をさへ隠れぬものにてらし、雨  
 たばれなど聲々によびのゝしる。且はかなしく且はいさましげ  
 なり。やがておそろしげなる夕雲の空にたち満ちて、降りくる雨  
 は玉うちなどする音して、風吹きそひ、林をゆすり、河波をあげ、とぶ  
 鳥は翅を折られ、蛙の歌もしばしは聲なくなん。さは思ふに叶ふ  
 今日ぞとて、里ごとに家ごとに、千秋よろづ代をうたふたのしさよ。  
 唐土にてもかゝる雨をよろこぶてふ文かきて、世に寫し傳へし例  
 もありき。  
 風は野分こそかなしけれ。ながめと降りかへては、いとさうぐ  
 しき秋になん。八月十日あまりの空の雲のまよひ、人の心をなや  
 ましうするよ。文つくり歌よむ人の、はらめる心をたがへ、酒くみ  
 舞ひあそばんのを、かしく業も空しからめ。里の夜の更けゆくま



ども軒の雪のつれなく音するは誰もく思ひきゆらんかし。曉  
 がたのおぼつかなき空に、雲間もりてきらくしき影をば、大かた  
 の人は見ずてやあらん。立待居まぢして見る月はすこしかけ損  
 はれこそすれ待戀ひし夜はいかて劣りなん。夜はいつにまれ、村  
 雨すぎし名残の雲には、はかなくさし出でたらん影に、垣根の草の露、  
 玉とちり時雨とそゞげるこそいともの、あはれとは眺めらるれ。  
 打ちかはす雁の翅のひまもりて、木末に滴するばかりなるは、こや  
 長月のしぐれの雨なるべし。山の色のはつかにそむると見るに、  
 こゝかしこ山めぐりしてふる雨は、すゞろ寒げなり。  
 神無月の雲のけしき、宮古も田舎もおなじ様にはるゝ日なきは、こ  
 れや時じく雨のよしなるを、其頃すぎにては、みぞれとふり、雪あら  
 れとこりて、枕をおどろかし、窓のもとに夜更くるまで文よむ人の、  
 心すさびをもよほすなん、いとあはれとおぼゆる。(藤篋冊子)

立待居  
 立待居  
 立待居  
 立待居

四 古戦場

むかししづ屋のうし、難波の大城もるつらに召加へられて、まうの  
 ぼり給ひし時、信濃の國きちかうの原といふ所をすぎて、詠ませ給  
 ひし歌、

ものゝふの草むすかばね年ふりて  
 秋風寒しきちかうのはら

この歌、加茂の翁のよしと褒めさせ給ひしかば、友垣の中には、いと  
 譽あるものに語りあひ侍りき。  
 其の野はや、人の語りしを今おもひ出づれば、限もなくひろらかな  
 る所なり。西のかたの大木蘇小岐曾の嶺を越えて、この野には下  
 り來るなり。東は、諏訪和田風ごし、碓氷の嶺々に立ちつゞきたる  
 べし。それがあまりの山々嶺々、立繞りたるには、ゆくさくさ、おて

しづ屋のうし

加藤美樹。幕府

大番の士。眞淵

門人。安永六年

歿、年五十三。

きちかうの原

長野縣東筑摩郡

桔梗ヶ原。

加茂の翁

加茂眞淵



露は云々  
みさぶらひ御笠  
と申せ宮城野の  
この下露は雨に  
まされり。(古今  
集)

もこのも、限のありて見ゆれば、さばかりの原野ともおぼさぬなるべし。夏過ぎ、秋風吹立ちて、篠すすき蘆がやに、這ひまつはるゝ眞葛の、うらみおもてみ躁ぎたつ。露は御笠と申せなど云ふべく散りみだれしには、道ゆく人の弓末のみに見えがくれして、はたご馬のゆくゝ人すまぬ霧の籬に立隠るゝ。  
此處なん甲斐越後、此の國のますらたけをのたゝかひのにはにて、旗さし物は、今見る雲霧のたえゝなびくに似て、弓ほこつるぎ、又の亂は、尾花高がやよりもしげく、大ぶえ小笛の音は、ありかさだめずすたく蟲の聲か。吹渡る風の音か。仇がうつ鼓か。こゝち惑ぞしぬべき。今日は彼方にかちほこり、あすは又うしろを見せて追ひうたるゝよ。その仇むすびし始をとへば、深きうらみのあるにもあらず、かたみに龍の雲にのりてみ空をかけりわたらんと、ほこり奢れる心の、すさまじきがなすにこそあれ。流るゝ血はいさ

霧原・望月  
共に信濃國にあ  
つた牧場。

さ川とせかれ、碎くる骨はさゞれとも敷きみちぬべし。かくて年ふりたらん後は、このあらがねの土の下は、ことゝ屍の積み埋みたらんが上にこそとふとおもへば、身の毛たち、つめたき汗は衣をとほすべし。  
しか心まどひしては、霧原望月の野に放ちかふ駒のいななきを驚かれぞする。残れるあつさの空に流るゝ星のゆくへを、鬼の火に見のおそれして、行手や近きこし方やなど、おぼしまどふを、心をしづめて思へば、我その仇か、彼を敵とも怨むべきにあらず。大君の御垣の内の國なりとも、いづこの土か人の骨の埋れたらざらん。年をふり、土にかへりては、春のら小田すきかへすより、ちまちのおくてかり納むるまで、男をとめの汚れまみるゝ、ひぢりこも、そのいみじき物のまじこりたらめ。今まのあたりならずとも、賢き人はおぼししるらめ。あなはかな、あないみじ。(藤篋冊子)



# 八 玉かつま

## 一 古書どものこと

めづらしき書をえたらんには、したしきもうときも同じこゝろざしならん人には、かたみにやすく借して見せもし寫させもして、世にひろくせまほしきわざなるを、人には見せず、己ひとり見てほくらんとするは、いとく、心ぎたなく、物學ぶ人のあるまじきことなり。たゞし、えがたきふみを遠くたよりあしき國などへかしやりたるに、あるは道のほどにてはふれうせ、あるは其の人にはかになくなりなどもして、つひにその書かへらずなる事あるは、いと心うきわざなり。されば遠きさかひよりかりたらんふみは、道のほどのことをもよくしたゝめ、又人の命は、にはかなることとはかりが

玉かつま  
本居宣長の隨筆、十四卷ある。宣長は伊勢松坂の人、國學四大人の一、賀茂眞淵の門人。享和元年歿、七十二歳。

たき物にしあれば、なからん後にもはふらさず、たしかにかへすべくおきておくべきわざなり。すべて人の書をかりたらんには、すみやかに見てかへすべきわざなるを、久しくとどめおくは心なし。さるは書のみにもあらず、人にかりたる物は、何もく、同じことなるうちに、いかなればにか、書はこ



(蹟筆の長宣居本)

とに用なくなりて後、なほざりに打捨ておきて、

久しく返さぬ人のよに多き物ぞかし。

## 二 學問

世の中に學問といふは、からぶみまなびの事にて皇國の古をまな



ぶをば、分けて神學、倭學、國學などいふなるは、例のから國をむねとして、御國をかたはらになせるいひざまにて、いとくあるまじきことなれども、古へはたゞから書學びのみこそありけれ、御國の學びとては、もはらとする者はなかりしかば、おのづから然かいひならふべき勢なり。しかはあれども、近き世となりては皇國のを、もはらとするともがらもおほかれ、からぶみ學びをば分けて漢學、儒學といひて、此の皇國のをこそうければりて、たゞに學問とはいふべきなれ。佛學なども、他よりは分けて佛學といへども、法師のともは、それをなんたゞに學問とはいひて、佛學とはいはざる、これ然るべきことわりなり。國學といへば、尊ぶかたにもとりなさるべけれど、國の字も事にこそよれ、なほうければぬいひざまなり。世の人の物いひざま、すべてかゝる詞に内外のわきまへをしらず、外つ國を内になしたる言のみ常に多かるは、からぶみをのみよみな

れたるからの、ひがことなりかし。

三 あらたなる説を出す事

ちかき世、學問の道ひらけて、大かた萬づのとりまかなひさとくかしくなりぬるから、とりくにあらたなる説を出す人おほく、其の説よろしければ世にもてはやさるゝによりて、なべての學者いまだよくもとゝのはぬほどより、われおとらじと、よにことなるめづらしき説を出して、人の耳をおどろかすこと、今のよのならひなり。其の中には、ずるぶんによろしきこともまれにはいづくめれど、大かたいまだしき學者の、心はやりていひ出づることは、たゞ人にまさらん勝たんの心にて、かろくしくまへしりへをも考へ合さず、思ひよれるまゝにうち出づる故に、多くはなかくなるいみじきひがごとのみなり。すべて新たなる説を出すは、いと大事な



童蒙抄

和歌童蒙抄の略。藤原範兼の著。古今の和歌を註釋したものである。

北野

天溝宮のこと。山城國葛野郡にある神社。

東行西行云々

菅原道眞の讀樂天北廳三友詩と題する詩の中の句。この詩は菅家後集にある。

り。いくたびもかへさひおもひて、よくたしかなるよりどころをとらへ、いづくまでもゆきとほりて、たがふ所なくうごくまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけばりてよしと思ふも、ほどへて後にいま一たびよく思へば、なほわろかりけりと我ながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。

四 からうたのよみざま

童蒙抄に、ある人北野にまうで、『東行西行雲渺々、二月三月日遅々』といふ詩を詠じけるに、少しまどろみたる夢に、『とさまにゆきかうさまにゆきて雲はるゝ、きさらぎやよひ日うらゝ』とこそ詠ずれ。』と仰せられけり云々。』とあり。昔は詩をもうるはしくは、かくさまにこそよみあげけめ。詠むるはさらなり。いにしへはすべてからぶみをよむにも、よまるゝ限りは皇國言（クニコト）によめる

は、字音（モツゴエ）は聞きにくかりしが故なり。然るを今はかへさまになりて、なべての詞も皇國言よりは字音なるをうるはしきことにし、書よむにもよまるゝ限りは字音によむをよき事とすなるは、からぶみまなびの爲には字音によむかた宜しき故もあればぞかし。

五 大神宮の茅葺なる説

伊勢の大御神の宮殿の茅葺なるを、後世に質素を示す戒なりと近き世の神道者といふ者などのいふなるは、例の漢意に諂ひたるうるさき僻事なり。質素を尊むべきも事にこそはよれ。すべて神の御事に質素をよきにする事さらになし。御殿のみならず、獻る物なども何も力のたへたらんかぎりうるはしく嚴めしくめてたくするこそ、神を敬ひ奉るにはあれ。みあらか又獻り物などを質素にするは、禮なく心ざし浅きしわざなり。抑伊勢の大宮の御殿



の茅ぶきなるは、上つ代のよそひを重みし守りて變へ給はざる物なり。然して茅葺ながらに、その嚴めしき事の世にたぐひなきは、皇御孫命の大御神を厚く尊み敬ひ奉り給ふが故なり。さるを御自らの宮殿をば麗しく物し給ひて、大御神の宮殿をしも質素にし給ふべきよしあらめやは。すべて近き世に神道者のいふ事は、皆からごゝろにして、古の意にそむけりと知るべし。

六 ふみよむことのたとへ

須賀直見がいひしは、廣く大きな書をよむは、長き旅路をゆくが如し。おもしろからぬ所もおほかるを、經行きては又おもしろくめさむるこゝちする浦山にもいたるなり、又あしつよき人ははやく、よわきはゆくことおそきも、よく似たり。とぞいひける。をかしたとへなりかし。

須賀直見  
宣長の高弟、宣  
長と同郷で松坂  
の人であつた。  
安永五年歿。

七 あらたにいひ出でたる説

大かたよのつねにことなる新しき説をおこすときには、よきあしきをいはず、まづ一わたりは世の中の學者にくまれそしらるゝものなり。あるは己がもとより來つる説といたく異なるを聞きては、よきあしきを味ひ考ふるまでもなく、始よりひたぶるにすてゝとりあげざる者もあり。あるは心のうちには、げにと思ふふしもおほくある物から、さすがに近き人のことにしたがはんこと、のねたくて、よしともあしともいはず、たゞうけぬかほして過すたぐひもあり。あるはねたむ心のすゝめるは、心にはよしと思ひながら、其の中の疵をあながちにもとめ出で、すべてをいひけたんとかまふる者も有り。大かたふるき説をば、十が中に七つ八つはあしきをも、あしき所をばおほひかくして、わづかに、二つ三つの



とるべき所のあるをとりたて、力のかぎりたすけ用ひんとし、新しきは十に八つ九つよくても、一つ二つのわるきことをいひたてて、八つ九つのおよきことをおしけちて、ちからのかぎりには我も用ひず人にもちひさせじとする、こは大かたの學者のならひなり。然れども又まれには、新なる説のよきを聞きては、古きがあしきことをさとりて、すみやかに改めしたがふたぐひもなきにはあらず。ふるきをいかにぞや思ひて、かくはあらじかとまでは思ひよれども、みづから定むる力なくて、疑はしながらさであるなどは、あらたなるよき説をきゝては、かくてこそはといみじくよろこびつゝ、たちまちにしたがふたぐひも有りかし。大かた新なる説は、いかによくてもすみやかに用ふる人まれなるものなれど、よきは、年をへても、おのづからつひには、世の人のしたがつものにて、あまねく用ひらるれば、其の時にいたりては、はじめにねたみそしり

しともがらも、心には悔しく思へど、おくれればせにしたがはんも、猶ねたく人わろくおぼえて、こゝろよからずながら、ふるきをまもりてやむともがらも多かり。しか世の中の論さだまりて、皆人のしたがつよになりては、始よりすみやかに改めしたがひつる人は、かしく心さとおもはれ、ふるきにかゝづらひて、どかくとゞこほれる人は、心おそくいふかひなく思はるゝわざぞかし。

八 おのが物まなびの有りしやう

おのれいときなかりしほどより、書をよむことをなん、よろづよりもおもしろく思ひて、よみける。さるははかしく師につきて、わざと學問すともあらず。何と心ざすこともなく、そのすぢと定めたるかたもなく、たゞからのやまとのくさん、のふみを、あるにまかせ、うるにまかせて、ふるきちかきをもいはず、何くれとよ



江戸にありし家  
宣長十一歳の  
時、その曾祖三  
郎右衛門が江戸  
傳馬町に創めた  
木綿問屋が亡  
び、十三歳の時、  
その祖父定治が  
江戸堀留町に開  
いた煙草店と兩  
替店とを停止し  
た。

契沖

難波の東なる高  
津の圓珠庵に住  
んだ僧で有名な  
國學者、元祿十  
四年歿、六十二  
歳。

餘材抄

古今集餘材抄の  
略。古今集の註  
解、二十卷ある。  
勢語臆斷  
伊勢物語の註  
釋。四卷ある。

みけるほどに、十七八なりしほどより、歌よまゝほしく思ふ心いで  
きて、よみはじめけるを、それはた師にしたがひてまなべるにもあ  
らず、人に見することなどもせず、たゞひとりよみ出づるばかりな  
りき。集ども、古きちかきこれかれと見て、かたのごとく今の世  
のよみざまなりき。かくてはたちあまりなりしほど、學問しにと  
て京になんのぼりける。さるは十一のとし、父におくれしにあは  
せて、江戸にありし家のなりはひをさへうしなひたりしほどにて、  
母なりし人のおもむけにて、くすしのわざをならひ、又そのために  
よのつねの儒學をもせんとてなりけり。  
さて京に在りしほどに、百人一首の改觀抄を人にかりて見て、はじ  
めて契沖といひし人の説をしり、そのよにすぐれたるほどをもし  
りて、此の人のあらはしたる物、餘材抄、勢語臆斷などをはじめ、其の  
外もつぎ／＼にもとめ出で、見けるほどに、すべて歌まなびのす

國

宣長の郷國伊  
勢。

冠辭考

賀茂眞淵の著。  
枕詞の語原等に  
ついて研究した  
もの。

ぢのよきあしきけぢめをも、やう／＼にわきまへさとりつ。さる  
まゝに、今の世の歌よみの思へるむねは、大かた心にかなはず、その  
歌のさまをかしからずおぼえけれど、そのかみ同じ心なる友は  
なかりければ、たゞ世の人なみに、こゝかしこの會などにも出でま  
じらひつゝ、よみありきけり。さて人のよむふりは、おのが心には  
かなはざりけれども、おのがたてゝよむふりは、今の世のふりにも  
そむかねば、人はとがめずぞ有りける。そはさるべきことわりあ  
り、別にいひてん。さて後、國に歸りたりしころ、江戸よりのほれり  
し人の、近きころ出でたりとて、冠辭考といふ物を見せたるに、ぞ、縣  
居大人の御名をも始めてしりける。かくて其のふみ、はじめに一  
わたり見しには、さらに思ひもかけぬ事のみにして、あまりことと  
ほくあやしきやうにおぼえて、さらに信ずる心はあらざりしかど  
猶あるやうあるべしと思ひて、立ちかへり、今一たび見れば、まれま



神書  
古事記・日本書紀等、わが國の神代の風俗・状態を知り得る方面の書。

れには、げにさもやとおぼゆるふし、もいできければ又立ちかへり見るに、いよくげにとおぼゆることおほくなりて、見るたびに信ずる心の出で來つゝ、つひにいにしへぶりのこゝろことばの、まことに然る事をさとりぬ。かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉の説は、なほいまだしきことのみぞ多かりける。おのが歌まなびの有りしやう、大かたかくのごとくなりき。さて又、道のまなびは、まづはじめより神書といふすぢの物、古きちかき、これやかれやとよみつるを、はたちばかりのほどより、わきて心ざし有りしかど、とりたてゝ、わざとまなぶ事はなかりしに、京にのぼりては、わざとも學ばんとこゝろざしはすゝみぬるを、かの契沖が歌ぶみの説になずらへて、皇國のいにしへの意をおもふに、世に神道者といふものゝ説くおもむきは、みないたくたがへりと、はやくさとりぬれば、師とたのむべき人もなかりしほどに、われいか

田安の殿

田安家は徳川氏の分家で三卿の一。この時の主人は宗武である。宗武は國學を好み著書が多い。賀茂眞淵の歿した年、即ち明和六年に薨じた。

で古のまことのむねを考へ出でんと思ふこゝろざしふかかりしにあはせて、かの冠辭考を得て、かへすゝよみあぢはふほどに、いよく心ざしふかくなりつゝ、此の大人をしたふ心、日にそへてせちなりしに、一年此のうし田安の殿の仰事をうけ給はり給ひて、此のいせの國より、大和・山城など、こゝかしこと尋ねめぐられし事の有りしをり、此の松坂の里にも二日三日とゞまり給へりしを、さることつゆしらで、後にきゝていみじくちをしかりしを、かへるさまにも又一夜やどり給へるをうかゞひまちて、いとくうれしく、いそぎやどりにまうでゝ、はじめて見え奉りたりき。さてつひに名簿を奉りて、教を承ることにはなりたりきかし。

九 縣居のうしの御さとし言

宣長三十あまりなりしほど、縣居の大人のをしへをうけたまはり



そめしころより、古事記の註釋を物せんのことろざし有りて、そのことうしにもきこえけるに、さとし給へりしやうは、われももとより神の御典をとかんと思ふ心ざしあるを、そはまづからごころを清くはなれて、古のまことの意をたづねえずばあるべからず。然るにそのいにしへのこころをえんことは、古言を得たるうへならではあたはず。古言をえんことは、萬葉をよく明らむるにこそあれ。さる故に、吾はまづもはら萬葉をあきらめんとする程に、すでに年老いて、のこりのよはひ今いくばくもあらざれば、神の御ふみをとくまでにいたることえざるを、いましは年さかりにて、行くさき長ければ、今よりおこたることなくいそしみ學びなば、其の心ざしとぐることに有るべし。ただし世の中の物まなぶともがらを見るに、皆ひきゝ所を経ずて、まだきに高きところにのぼらんとする程に、ひきゝところをだにうるることあたはず、まして高き所はうべ

きやうなければ、みなひがことのみすめり。此のむねをわすれず、心にしめて、まづひきゝところよりよくかためおきてこそ、たかきところにはのぼるべきわざなれ。わが未だ神の御ふみをえとかざるは、もはら此のゆゑぞ。ゆめしなをこえて、まだきに高き所をなのぞみそと、いとねもごろになんいまして、さとし給ひたりし。此の御さとし言のいとたふとくおほえけるまゝに、いよく萬葉集に心をそめて、深く考へ、くりかへし問ひたゞして、いにしへのころ詞をさとりえて見れば、まことに世の物しり人といふ者の神の御ふみ説ける趣は、みなあらぬから意のみにして、さらにまことの意はえ得ぬものになん有ける。

一〇 おのれ縣居の大人の教をうけしやう

宣長、縣居の大人にあひ奉りしは、此の里に一夜やどり給へりしを



り一度のみなりき。その後は、たゞしばしば書かよはしきこえてぞ、物はとひあきらめたりける。そのたびく給へりし御こたへのふみども、いとおほくつもりにたりしを、ひとつもちらさず、いつきもたりけるを、せちに人のこひもとむるまゝに、ひとつふたつととらせけるほどに、今はのこりすくなくなんなりぬる。さて古事記の註釋を物せんの心ざし深き事を申せしによりて、その上つ卷をば考へ給へる古言をもて假字がきにし給へるをもかし給ひ、又中つ卷下つ卷は、かたはらの訓を改め、所々書入などを、てづからし給へる本をもかし給へりき。古事記傳に師の説とて引きたるは、多く其の本にある事どもなり。そもく此の大人、古學の道をひらきたまへる御いさをは、申すもさらなるを、かのさとし言にのたまへることく、よのかぎりもはら萬葉にちからをつくされしほどに、古事記書紀にいたりては、その

古事記傳

古事記の註釋、本居宣長が學生の大著述、三十五歳の時に筆を起して三十五年かゝつて完成した。全部四十八卷。

考いまだあまねく深くはゆきわたらず、くはしからぬ事ども、おほし。されば道を説き給へることも、こまかなることしなれば、大むねもいまださだかにあらはれず。たゞ事のついでなどには、はしくいさゝかづゝのたまへるのみなり。又からごゝろを去れることも、なほ清くはさりあへ給はで、おのづから猶その意におつることも、まれくにはのこれるなり。

一一 師の説になづまざる事

おのれ、<sup>イニシテ</sup>古典をとくに、師の説とたがへること多く、師の説のわるき事あるをば、わきまへいふこともおほかるを、いとあるまじきことと思ふ人おほかんめれど、これすなはちわが師の心にて、常に教へられしは、後によき考の出で來たらんには、必ずしも師の説にたがふとて、なほさかりそとなん教へられし。こはいと尊き教にて、わ



が師のよにすぐれ給へる一つなり。大かた古をかながふる事、さ  
らにひとり二人の力もて、ことごとくあきらめつくすべくもあら  
ず、又よき人の説ならんからに、多くの中には誤もなかなからん。  
必ずわろきこともまじらではえあらず。そのおのが心には、今は  
いにしへのころにことごとく明らかなり、これをおきてはある  
べくもあらずと思定めたることも、おもひの外に、又人のことなる  
よき考もいでくるわざなり。あまたの手を経るまに、さきさ  
きの考のうへを、なほよく考へきはむるからに、つぎ／＼にくはし  
くなりもてゆくわざなれば、師の説なりとて、必ずなづみ守るべき  
にもあらず。よきあしきをいはず、ひたぶるにふるきをまもるは、  
學問の道にはいふかひなきわざなり。又おのが師などのわろき  
ことをいひあらはすは、いともかしこくはあれど、それもいはざれ  
ば、世の學者その説にまどひて、長くよきをしる期なし。師の説な

りとして、わろきをしりながら、いはずつゝみかくして、よさまにつ  
くろひをらんは、たゞ師をのみたふとみて道をばおもはざるなり。  
宣長は道を尊み古を思ひて、ひたぶるに道の明らかならん事を思  
ひ、古のこのあきらかならんことをむねと思ふが故に、わたくし  
に師をたふとむことわりのかけんことをば、えしもかへり見ざる  
ことあるを、猶わろしとそしらん人はそしりてよ。そはせんかた  
なし。われは人にそしられじ、よき人にならんとて、道をまげ古の  
意をまげて、さてあるわざはえせずなん。これすなはちわが師の  
心なれば、かへりては師を尊むにもあるべくや。そはいかにもあ  
れ。

一一二 わがをしへ子に戒めおくやう

吾にしたがひて物まなばんともがらも、わが後に又よき考のいで



きたらんには、必ずわが説にな泥みそ。わがあしきゆゑをいひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明らかにせんとなれば、かにもかくにも、道をあきらかにせんぞ、吾を用ふるには有りける。道を思はて、いたづらにわれを尊まんは、わが心にあらざるぞかし。

一三 富貴を願はざるをよき事にする論

世々の儒者、身のまづしく賤きをうれへず、とみ榮えをねがはずよろこばざるをよき事にすれども、そは人のまことの情コトにあらず。おほくは名をむさぼる例のいつはりなり。まれくレにさる心ならん者ありとも、そは世のひがものにこそあれ、なにのよき事ならん。ことわりならぬふるまひをして、あながちにねがはんこそはあしからぬ、ほどくレにつとむべきわざをいそしくつとめて、なり

のほり富みさかえんこそ、父母にも先祖にも孝行ならぬ。身おとろへ家まづしからんは、うへなき不孝にこそ有りけれ。たゞおのがいさぎよき名をむさぼるあまりに、まことの孝をわする人も、又もろこし人のつねなりかし。

一四 ひとむきにかたよることの論

世の物しり人の、他の説のあしきをとがめず、一むきにかたよらず、これをもかれをもすてぬさまに論アツラヒをなすは、多くはおのが思ひとりたる趣をまげて、世の人の心にあまねくかなへんとするものにて、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ世の人はいかにそしるても、わが思ふすぢをまげてしたがふべきことにはあらず。人のほめそしりにはかゝはるまじきわざぞ。大かた一むきにかたよりにて他説アゲトキコトをばわろしとがむるをば、心せばくよからぬ事とし、ひと



むきにはかたよらず、他説をもわろしとはいはぬを、心ひろくおいらかにてよしとするは、なべての人の心なめれど、かならずそれさしもよき事にもあらず。よるところ定りて、それを深く信ずる心ならば、かならずひとむきにこそよるべけれ。それにたがへるすぢをば、とるべきにあらず。よしとしてよる所に異なるは、みなあしきなり。これよければ、かれはかならずあしきことわりぞかし。然るを、これもよし又かれもあしからずといふは、よる所さだまらず、信ずべき所を深く信ぜざるものなり。よる所さだまりて、それを信ずる心の深ければ、それにことなるすぢのあしきことをば、おのづからとがめざることあたはず。これ信ずるところを信ずるまめごゝろなり。人はいかにもおもふらん、われは一むきにかたよりにあだし説をばわろしとがむるも、必ずわろしとは思はずなん。

一五 前後と説のかはる事

同じ人の説の、こゝとかしことゆきちがひて、ひとしからざるは、いづれによるべきぞとまどはしくて、大かた其の人の説すべてうきたるこゝちのせらるゝ。そは一わたりはさることなれども、なほさしもあらず。はじめより終まで説のかはれることなきは、中々にをかしからぬかたもあるぞかし。はじめに定めおきつる事、ほどへて後に又ことなるよき考の出来るは、つねにある事なれば、はじめとかはれることあるこそよけれ。年をへて學問すゝみゆけば、説は必ずかはらでかなはず、又おのがはじめの誤を後にしりながらは、つゝみかくさで、きよく改めたるもいとよき事なり。殊にわが古學の道は、近きほどよりひらけそめつることなれば、すみやかにことゝくは考へつくすべきにあらず、人をへ、年をへてこ



そ、つぎ／＼に明らかには成りゆくべきわざなれば、一人のときごとの中にも、さきなると後なると異なることは、もとよりあらではえあらぬわざなり。そは一人の生のかぎりのほどにも、つぎ／＼明らかになりゆくなり。されば、そのさきのと後のとの中には、後の方をぞ其の人のさだまれる説とはすべかりける。但し又みづからこそ初めのをばわろしと思ひて改めつれ、又のちに人の見るには、なほはじめのかたよろしくて、後のは中々にわろきもなきにあらざれば、とにかくに、えらびは見ん人の心になん。

一六 花のさだめ

花はさくら、櫻は山櫻の葉あかくてりて、ほそきがまばらにまじりて、花しげく咲きたるは、又たぐふべき物もなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて、花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大

かた山ざくらといふ中にもしなく、の有りて、こまかに見れば、一本ごとにいさゝかかはれるところ有りて、またく同じきは、なきやうなり。又今の世に、桐がやつ、八重一重などいふも、やうかはりて、いとめでたし。すべてくもれる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず。松も何もあをやかにしげりたるこなたに咲けるは、色はえてことに見ゆ。空きよくはれたる日、日影のさすかたより見たるは、にほひこよなくて、おなじ花とおぼえぬまでなん。朝日はさらなり、夕ばえも。

梅は紅梅、ひらけさしたるほどぞ、いとめでたきを、さかりになるまに、やう／＼しらせゆきて、見どころなくなるこそ、いとくちをしけれ。さくらの咲けるころまでも、ちることしらで、むげに匂なくねびれしほみてのこりたるを見れば、げに有りてよの中は、何事もみなかくこそと、見る春ごとにおもひしらるかし。白きはすべて

有りてよの中云  
云  
のこりなくちる  
ぞめでたき櫻花  
ありて世の中は  
てのなれば。  
(古今集)



香こそあれ、見るめはしな、おくれたり。大かた梅の花は、ちひさき枝を物にさして、ちかく見たるぞ、梢ながらよりは、まされる。桃の花は、あまた咲きつゞきたるを、遠く見たるは、よし、ちかくては、ひなびたり。山ぶき、かきつばた、なでしこ、萩すゝき、女郎花など、とりどりにめでたし。菊も、よきほどにつくろひたるこそ、よけれ、あまりうるはしくしたゝかにつくりなしたるは、中々にしななく、なつかしからず。つつじ、野山に多く咲きたるは、めさむるこゝちす。かいだうといふ物、からめきて、こまやかにうるはしき花なり。そも、かくいふは、みなおのが思ふ心にこそあれ、人は又おもふ心ことなるべければ、一やうにさだむべきわざには、あらず。又いまやうのよの人のもては、やすめる花ども、よにおほかるをかぞへいでぬは、ことさらめきたるやうなれど、歌にもよみたらず、ふるき物にも見えたることなきは、心のなしにや、なつかしからず、おほ

ゆかし。されど、それはたひとやうなるひがこゝろにや、あらん。

一七 道のひめぐと

いづれの道にも、其の大事とて世にひろくもらさず、ひめかくす事おほし。まことに其の道大事ならば、殊に世に廣くこそせまほしけれ。あまりに重くして、たやすく傳へざれば、せばくなりて、絶えやすきわざぞかし。そもみだりにひろくしぬれば、其の道かろがろしくなることゝいふなるも、一わたりはことわりあるやうなれども、たとひかるゝしくなるかたは、ありとも、なほ世にひろまるこそは、よけれ。廣ければ、おのづから重きかたは、あるぞかし。いかにおもゝしければ、とても、せばくかすかならんは、よきことにあらず。まして、絶えもせんには、何のいふかひかあらん。されど、近き世に、道々に秘傳・口訣などいふなるすぢ、多くは、道を重くす



といふは、たゞ名のみにて、まことは人にしらすずて、おのれひとり  
の物にして、世に誇らんとするわたくしのきたなき心、又それより  
もまさりてきたなき心なるぞ多かる。さるたぐひも、もろくの  
はかなき伎藝の道などは、とてもかくてもありぬべけれど、うるは  
しくはかゝしき道には、さること有るべくもあらず。

一八 しづかなる山林を住みよしといふ事

世々の物しり人、又今の世に學問する人なども、みなすみかは里と  
ほくしづかなる山林を、すみよくこのましくするさまにのみいふ  
なるを、われはいかなるにか、さらにさはおほえず、たゞ人げしげく  
にぎはしき處の好ましくて、さる世ばなれたる處などは、淋しく  
て心もしをるゝやうにぞおほゆる。さるはまれゝにものして、  
一夜たびねしたるなどこそは、めづらかなるかたにをかしくもお

ほゆれ、さる處につねにすまゝほしくはさらにおほえずなん。人  
の心はさまざまなれば、人うとくしづかならん處をすみよくおほ  
えんもさることにて、まことにさ思はん人もよには多かりぬべ  
れど、又例のつくりごとの漢ぶりの人まねにさいひなして、なべて  
の世の人の心とことなるさまにもてなすたぐひも、中には有りぬ  
べくや。かく疑はるゝも、おのが俗情サトルココロのならひにこそ。

一九 おのが京のやどりの事

宣長享和のはじめのとし、京にのぼりて在りしほどやどれりしと  
ころは、四條の大路の南づらの烏丸のひんがしなる所にぞ有りけ  
るを、家はやゝ奥まりてなん有りければ、物のけはひうとかりけれ  
ど、朝のほど夕ぐれなどには、門に立出でつゝ見るに、道も廣くはれ  
ばれしきに、ゆきかふ人繁くいとにぎはしきは、ゐなかに住みな



れたるめうつしこよなくて、めさむるこゝちなんしける。京といへど、なべてはかくしもあらぬを、此の四條の大路などは、ことにぎは、しくなんありける。天の下三ところの大都の中に、江戸、大阪はあまり人のゆき、多くらうがはしきを、よきほどのにぎはひにて、よろづの社々寺々など、古のよしある多く、思ひなし尊く、すべて物きよらに、よろづの事みやびたるなど、天下にすまゝほしき里は、さはいへど京をおきて外にはなかりけり。

駿臺雑話

室直清の隨筆で、五卷ある。直清は鳩巢と號し、幕府の儒官となつて江戸駿河臺に住んだ。享保十九年歿、七十七歳。  
忍が岡 今の上野公園。  
將軍家 寛永の頃とあるから、三代將軍家光のことであらう。

九 駿臺雑話

一 老僧が接木

忍が岡のあなた谷中のさとに、何がしの院とて、ひとつの眞言寺あり。翁いとけなかりし頃、其の住僧をしりてしばし寺に行きつ、木の實ひろひなどして遊びしが、住僧かたへの人にもかひて、前住の時の事をなん語りしをき、侍りしに、寛永の頃の事になん、將軍家谷中わたり御鷹狩のありし時、徒歩にてこゝやかしこ御過ぎがてに御覽ましましたしけるが、此の寺へもおもほえず渡御ありしに、折ふし其の時の住僧はや八旬に及びて、庭に出て、みづはぐみつ、手づから接木して居けるが、御供の人々おくれ奉りて、お側に二人三人つき奉りしを、中々やんごとなき御事をば思ひよらねば、そ







東照宮  
徳川家康。  
木多佐渡守  
名は正信、家康  
の重臣。

二 直諫は一番槍より難し

東照宮、遠州濱松の御城に御座なされし時、ある夜木多佐渡守並に外様の者三人、御用の事ありて御前に召出さる。御用すみて、三人の者は退出しけるが、中に一人、御前にて鼻紙袋より筆記の物一通取出し、自身に御前へ持ちてさしあげけり。「それは何ぞ。」と御尋ねあれば、日ごろ私の存じよりに候事ども、書付けおき申し候。憚りながら、萬に一つも御心得にもなるべきかと存知候うてさし上候。「由を申しければ、それは奇特なる心入かな。」と御感なされ、佐渡守はきゝてもくるしからず。それにて讀みて聞かせよ。」と仰せらるゝ程に、數箇條ありしを段々讀みけるに、一箇條を讀終る毎に、「尤なる事」と御挨拶ありて、其の筆記の物は是へ。」とて御取りあそばし、さて仰せられけるは、是に限らず、此の後も存じよりたる事あ

らば、少しも遠慮なくいひきかせよ。」とありしかば、御聞きとゞけあそばされ、かたじけなく存じ奉る。」と申して御前を立ちけり。其の跡に佐渡守残り居けるが、さても彼の者、卒爾なる仕かたにて候。それに、一箇條も御用に立ち申すべきと存ずる事はきこえ申さず候。」と申上げければ、御手をふらせ給うて、「いやとよ、さして用いたつほどの事はなけれども、其の身相應の思案をつくし、内々書付け置いて我等に見せんと思ふ志は、なによりも奇特なる事ぞかし。其の言ひ上る事、用にたてばとり、用にたゝねばとらぬまでにこそあれ。卒爾なるしかたなどといふべき事にはあらず。惣じて上も下も、我が身の過は知らぬものなり。されど小身なる者は、心安き友達、傍輩などあれば、たがひに身の上の悪しき事をいうて吟味もする程に、心付きて改むる事おほし。是は小身の益なり。大身なるものは、友達、傍輩と出合ひて心安く語るといふ事もなけ



上野介  
名は正純。

れば、常に合ふものとは、家臣所従ばかりなり。それらは、大方の事をば、御尤とならではいはぬほどに、我が過を知るべきやうなし。しらねば改むる心もつかずして、打過ぐるのみなり。是は大身の損といふべし。古より富貴なる者の國を失ひ家を亡すは、大かた我が過をいひきかするものなくて、自身にする事をよきとばかり思ふ故なり。しかれば、わが悪事を告げしらする者は大切に思ふべきにあらずや。」と仰せられしを、佐渡守承りて覺え居けるが、あるとき嫡子上野介に語りきかせ、上の御思慮のふかきにそへて御仁厚なる事をいうて、落涙に及びしに、上野介きゝて、其の人は誰にて候ひつる。其の申上げし事はいかやうの事にて候や。」と尋ぬられければ、佐渡守、上野介を叱りて、たゞ上の思召の結構なる事を思ふべし。其の人の名も、その申上げし事も、汝きゝて何にせんとおもふぞ。」とて、いひきかせざりしとぞ。上野介年わかにて

駿府  
今の静岡市。家  
康は隠居の後こ  
の城に住んだ。

其の人を嘲る心にて、をかしく思うて名をきき、其の事をきかんといはれしを、佐渡守合點して押へられしなるべし。其の後駿府の御城に御座なされし時、御側に侍座の衆へ上意ありしは、人君はよき家老を持つべき事なり。我常におもふに、主君の悪事あるを見て、主君の怒をもかへり見ず諫言をいり、家老は、戰場にて一番槍をするよりも、遙にまさりたる心ばせといふべし。其の子細は、敵に向つて勝負をするも、身命を庇ひてはならぬ事なれども、必ず敵にうたるべきにもあらず。たとひ討死しても、世に名を残し主君にもをしまれぬれば、死しても本望なる事なり。又敵を討取りぬれば、主君の感にあづかり恩賞を得て子孫にも傳はれば、戦場のはたらきは生死とも心にいさみあるべし。それとはちがうて、主君の無道なるをなげきて、しばし直諫すれば、忠言耳に逆ふ習にて、主君の心にあはぬ程に常にいとひ嫌はれて、たゞ禮



貌にてあひしらはれ、日に疎遠になるものなり。それに新進容悦の諂ひものども、件の家老を事にふれて讒する程に、日を逐うて主君の目見せあしくなりて、何をいうても用ひられず。其の時はいかなる忠臣も退屈する故に、或は病氣と稱し、或は致仕をねがうて身を引退く分別するぞかし。然るに、主君の氣に背くにもかまはず、幾度もすゝみいで、極諫しなば、主君怒を積みて、手討にするか又は押籠めて出さぬやうにするにてあるべし。それを露も心にかかけず、たゞわが報國の志をつくして終るは、世にありがたき忠臣といふべし。是に比すれば、戦場の一番槍は却てやすき道理なり。と仰せられしとなん。誠に萬世御子孫の御事は申すに及ばず、すべて人君たる人の永き鑑戒となるべき御言葉どもなり。

三 杉田壹岐

寛永  
三代將軍家光の  
時の年號。  
故伊豫守  
越前福井の藩祖  
松平忠昌。

寛永のころ、越前故伊豫守殿の家老に、杉田壹岐といふ者あり。もとは足輕なりしが、其の身の材をもて、微賤より登庸せられ、厚祿をうけ、國老に列しけり。伊豫守殿參觀にて、一年在江戸の内、費用過分なりしを、常に前年より支度して、用度足るやうにしけるは、ひとへに壹岐が功なりしとかや。それはさる事にて、常に顔を犯して直言して、君の過を匡救する事を忘れず。

ある時、伊豫守殿在國にて鷹狩し、哺時に及びて歸城あり。家老どもに對して、今日わか者どものはたらき、いつにすぐれて見えし。あれにては萬一の事もありて出陣すとも、上の御用にもたつべしと覺ゆるぞかし。其方どもも承りて、いづれも喜び候へ。」とありしかば、家老どもいづれも、御家のため、何よりめでたき御事にて候。」といひしに、壹岐一人末座にありけるが、黙々として居たりしを、何とぞいふかと、しばらく見あはせられしが、こらへかねられ、壹岐は



何とおもふ。」とありしに、其の時壹岐、只今の御意承り候に、はゞかりながら歎かしき御事に存じ候。當時士ども御鷹野などの御供に出で候とは、さきにて御手討になり候はんも計りがたく候とて、妻子に暇乞して立別れ候と承り候。かやうに、上を疎み候うて思ひつき奉らず候うては、萬一の時御用に立つべきとは存ぜられず候。それを御存知なく、頼もしく思しめさるゝとの御意こそ、愚なる御事にて候へ。」といひしかば、伊豫守殿大きに氣色損じければ、何がしとかやいひし者、伊豫守殿の刀もちて側に居たりしが、壹岐に「座を立ち候へ。」といひしを壹岐聞きて、其の人をはたとにらみ、何れもは、御鷹野の御供して猪猿を逐うてかけ廻るを御奉公とす。此の壹岐が奉公はさにてはなし。いらざる事申し候な。」とて、其のまゝ脇指を抜いてうしろへ投げすて、伊豫守殿の側へ進みより、たゞ御手討に遊ばされ候へ。むなしくながらへ候うて、御運

の衰へさせ給ふを見候はんよりは、只今御手にかゝり候はゞ、せめて御恩の報じ奉る志のしるしと存じ候はん。」といひて、頭をのべ平伏しけるを見給ひて、なにともしはて奥へいられけり。其のあとにて、外の家老ども壹岐にむかひて、御爲を思ひて申されしは尤にて候へども、折もあるべき事にて候。今日御鷹野より御機嫌にて御歸りありしに、御氣さきををられ候事は、遠慮もあるべき事にこそ。」と云ひしを壹岐、君へ諫を申上げ候に、御機嫌を考へ候ひては、よき折とはなき物にて候。今日はよき序とこそ存じ候へ。其上某事は、御取立の者にて候へば、各とは譯の違ひたる者にて候。御手討にあひ候うても、其の分の事にて候。」といひければ、諸家老各感じあひける。さて家に歸りつゝ、切腹の用意して、君命の下るを待ちけるが、日ごろ糟糠の妻のありけるにむかうて、其の許にいひおく事たゞひと



つ侍り。御身は女の身なれば、直に御恩をうけたるにてはなけれども、我御厚恩を荷ふ故に、足輕の妻といはれし身が、今歴々の妻として、大勢の所従に圍繞せられしは、かぎりなき御恩にあらずや。しかれば、われ生害仰付けらるゝ後にても、たゞ朝夕、今まで御恩の有りがたかりし事を忘れずして、かりにも上を怨み奉る心あるべからず。もし女心とて、我が身のものうきにつけて、上を怨み奉るやうなる事を、言葉の末にもつゆおきなば、黄泉の下までもふかく怨と思ふべし。」といひける。

さて今やと待ちけるに、夜ふくる程に人來て門を叩きしが、召あるまゝ、登城すべし。」となり。さてこそとおもひて登城しけるに、すぐに寢所へめし入れ、其方が晝いひし事、心にかゝりて寢られぬ間、夜陰なれどもよびつるなり。わが誤りたる事は、とかくいふに及ばず。其方が心ざしをふかく感じ思うて満足する。」との事にて、

直に腰の物を賜りしかば、壹岐も思ひ寄らぬ事にて、おぼえず落涙に咽びつゝ、拜賜してまかり出てけるとぞ。

#### 四 燈臺もと暗し

三伏の夏もはや半ば過ぎ行きし頃、人々すゞみがてらに駿臺の菴にとぶらひ來けり。折ふし積雨新に霽れて、夕日梢にのこれるに、庭の竹樹露すゞしく、池の芙蓉風かをり、なにとなく見すぐしが、たき折からなり。諸客はしるしつゝ、勾欄によりて詩歌を朗詠しけるが、はやものゝあやめも見えぬばかりに暮れゆけば、やがて内に入りて翁にいとま申さんといふを、今しばしとあれば、さらば宵の間過ぐる程、こゝにありて御物語承らん。」とて各坐につきけり。しばらくありて燭もて至りぬるに、翁ふとおもひよりしまゝ、燭臺をさして、世俗の諺に燈臺もと暗しといふは、いかやうの事にたと



道在邇云々  
孟子離婁章句上  
にある句。

羅大經  
宋人、字は景綸、  
廬陵の人。  
鶴林玉露  
羅大經著。十八  
卷、天地人の三  
集に分つ、一種  
の隨筆。

へていふにやあらん。おのゝうて見給へ。」とあれば、座客の中ひとりいひけるは、世に何事にもあれ、外にはかくれなき事を、そのもとにてきけば却て分明ならぬやうの事に、かく申しならし候。但し我等が愚見にて、是に道理をつけて申し候はゞ、孟子の「道在邇而求諸遠」といふ意にも喩へば、たとへつべし。人ごとに本を忘れて末をつとめ、近きをすて、遠きに求むるは、常の事にて候。是を弓射る者の、的のみに志して、あたりの手前にある事を知らぬにたとへたれば、燈臺のもと暗きにたとへても、同じこゝろならんかし。」又ひとり聞きて、されば其の事にて候。羅大經が鶴林玉露に、悟道といふ尼の作として、

盡日尋春不見春 芒屨踏遍隴頭雲  
歸來笑撚梅花嗅 春在枝頭已十分

是も道のちかきに在りて遠きに求むるたとへなり。終日山野に

東晋  
西晋の後に立つた國、十一代、百四年で宋に併せられた。  
桓温  
東晋末の將軍、權勢を張り專恣を極めた。  
三秦  
函谷關以西、散關以東、古の秦の地。  
王猛  
西秦の符堅に仕へて大に之を輔けた人。

春を尋ねくらしして、春はとくにわが宿の梅にある事をしらずといへるも、燈臺もとくらきの意にもよくかなひて、いとゞおもしろくこそ候へ。」又ひとり、道のさたばかりにも限らず、外の事にもあるべし。たとへば東晋の時、桓温三秦に打入りしに當つて、王猛來見しけるに、「三秦の豪傑、なにとていまだ一人も見え來らぬ。」と問ひしにぞ、桓温が眼のくらきもしられけり。三秦の豪傑王猛に過ぎたるものやあるべき。眼前に豪傑あるをしらずして、豪傑にむかうて豪傑を問ひしは、燈臺もとくらきにて候はゞや。」又ひとり、「古より倭漢共に英主の遠略をつとむるが、其の威望遠く敵國に及べども、まぢかく蕭牆のもとに敵ある事をしらざるも、燈臺もと暗きにたとふべし。近代日本にていはゞ、織田信長、關東關西の諸國まで手をのばし討ちしたがへられしかども、手本にくらうして明智にころされし、燈臺もとくらきにあらずや。」といふを、翁きよて、



「すべて此の諭の語は、義理のとりやうにて色々に申さるゝ物にて候。此の諭も各たがひに其の義をつくされしにて、もはや此の外はあ  
るまじく覚え侍る。但し各の申さるゝはいづれも燈臺もと暗し  
をあしきかたにたとへらるゝにて候。翁は又此の諭をよろしき  
方に取りなして聞きたくこそ侍れ。又一種の道理もあるべきに  
や。韓退之が短檠の歌に、『長檠八尺空自長、短檠二尺便且光』  
とつくれるごとく、燭臺も長きは燭のもとくらく、短きは燭のもと  
あかるし。夜中に書をよみ、字を寫すやうの事には、手もとを明ら  
かにして其の用をかなふる故に、短きを貴ぶにて候へども、ざりと  
て一二尺の手燭にては、燭のもとこそあかるくあるべけれ、此の座  
上にては、くまぐまのくらきを照しぬる事は難かるべし。まいて  
稠人廣座をいかゞして、照し申すべしや。しかれば、もとをあかる  
くしては遠きを照し難し。遠きをてらすは必ずもと暗きものと

關尹子  
周の尹喜が撰し  
たものといはれ  
る書。  
道德經  
老子の著、普通  
に老子といつて  
ゐる。

しるべし。翁いつの比か、關尹子を見侍りしに、吾が道は暗きに處  
るがごとし。よく明中の事を區畫す」といへり。關尹子は關令  
尹喜が書なり。尹喜は老子の弟子にて、道德經五千言も此の人の  
爲にあらはせるとなり。今世に傳ふる關尹子の書は、大かた後人  
の作にて尹喜に名を託したる物にてあらんかし。されど老子の  
道は、たしかに暗きに處るを宗とすることにて侍る。但し老子の  
道にも限るべからず。吾が儒にも簡要とする事なり。たとへば  
わが身くらがりにて、くらがりよりあかりを見ればあかりの事  
残なく見ゆるものなり。わが身あかりにて、あかりよりくらが  
りを見ては、くらがりの事一切見えぬものぞかし。さればくらが  
りにゐてあかりを見るやうに、己が智をふかくひそめ養ひて、くら  
きより明らかなるを生ずるやうにすれば、其の明悠長寛大にて、自  
然に遠きにおよびなん。それこそ眞の明といふべけれ。もし己



が材智にほこり聰明を盡して、たゞ手もとのあかるきを専にせば、あかりにゐてくらがりを見るがごとし。其の明、淺近短慮にて、遠きに及ばざるのみならず、たゞ手もとの事のみ見えて下手の棊をうつがごとし。末の手は見えざる程に、毎々是非をあやまる事も多かるべし。こゝをもて、聖人易において「明入地中明夷、君子以莅衆用晦而明」と宣へり。古の聖王、冕旒目を蔽ひ、鞋續耳を塞ぐも、聰明の刃はやきをきらうて、晦きをもちひて養はんとなり。古より、倭漢ともに大智遠識の人の、己が材智に傲りて、好んで自ら用ふるを聞かず。『老子の』『良賈深藏若虛、君子盛徳若愚』といへるも、げにさることぞかし。ちかきころ、故板倉周防守京都に留守たりし時、訴訟をきかれしに、己が材智のはやまり、聲色のうごきなば、我もそれに氣乗じ、彼もそれに氣奪はれ、兩造の辭を審かにせず、雙方の情を盡さざる事あらんとて、必ず障子を隔て、わざと手づから

良賈云々  
老子曰、吾聞之、  
良賈深藏若虛、  
君子盛徳容貌  
若愚(史記列傳)  
板倉周防守  
重宗のこと。

茶をひきなどし、たゞ心のちらぬやうにしてきかれしとなり。さすが近代の名人とはいひながら、おのづから聖人の心にもかなへり。それ故、曲直理を盡し、聽斷神に通じ、人々畏服せざるはなし。いはゆる晦を用ひて明なるにあらずや。今に至りて、世の談者傳へ誦して口實とする事、枚舉するにいとまあらず。中にも翁が最も感じおもふ事あり。周防守ある時、京の在家を通られしに、さる家に幼少の子出であそびしが、あれ周防こそ通らるれ。」といひしを、周防守馬上にて聞きとがめて、我不肖といへど、上の御代官としてこゝにあれば、京中村閭に住する者、男女老弱をいはず、我をかくおしくだしていふ事あるべからず。しかるに此の家の兒輩かくいふは、常に家人の我をうらみてかくいふを聞馴れし故なるべし。是は定めて子細あるべし。」とて、其の家主の名をきかせて通られしが、翌日其の家主を召しよせて、汝先年何にても訴訟したる事や



ある。今尋ねるは、少しもきづかひなる事にてはなし。ありしやうに申すべし。」といはれしかば、始め何かと辭退しけるが、再三とはれて、此の上はかくさず申し上候。その年その月の事にて候。父の配分の事に就きて、一類の者と争ひ候うて訴へ候ひしが、其の者無實の事を申しかけ候へども、證人どもを多くこしらへ候うて申出で候故、御聽斷の上相手の勝に定まり候。其の次第かやうかやうとくはしく語るを、下役人に命じて其の年にあたりし簿案をくらせけるに、すこしもたがひなかりしかば、其の上にていよいよ尋ねきはめて、是はたしかに某が聽きあやまりたるなり。いと残念なれども、もはや年久しき事なれば今更すべきやうなし。其の配分ほどを、某償つて我が過を謝すべし」とて、自分の金銀を出して其の者へとらせられしとぞ。是にてしるべし、周防守己が威勢をつのらず、己が過失をかくさず、我は常に晦に處て明を銜はず、

君子の道云々  
君子之道、闇然  
而日章。小人之  
道的然日亡。(中  
庸)

我は常に愚に處て智を先だてず、其の心公にして私なし、誠に古今に有りがたき明智といふべし。今是等をもて此の諺を考ふに、燭臺は、ながくしてもとのくらきにて其の明おのづから遠きに及ぶ。君子の道は、闇然として日にあきらかなるがごとし。もし短うしてもとあかるければ、其の明わづかに近うしてやみぬ。小人の道は、的然として日にほろぶるがごとし。此の理をしめして、明かなるものは、必ずもとを暗うすといふ心にて、燈臺もとくらしといふにもあらんかし。但し此の諺の正意は、各のいへるごとくなるべし。翁がいへるをば、姑く一説にそなへ給へかし。さても根もなき事にあまりくはしき僉議かな。」とて、翁微笑しければ、諸客、かやうの事にも、翁の心のつけられやうこそ別段の事にて候へ。」とて各感じあへり。



五 月は世々の形見

今年もはや半ば過ぎぬれば、いつしか秋のけしきたちて、萩吹くか  
 ぜも身にしむころなり。久しく翁のがり行かねば、此のほどの老  
 のねざめも覺束なし。いざたづね訪はんとて、ある夕暮に例の人  
 人打ちつれて來しが、又もまゐらんとて歸らんとせしを、翁とゞめ  
 て、今宵は月もよし、薄酒すゝめ奉らん。しひてとまり給へ。」とい  
 へば、翁の心をいかでそむくべき。さあらば。」とて、各座をしめて  
 清談の露やうく、繁き程に、家人やがて心得て、取りあへぬまでに  
 あるじまうけし、さかな取りそへて盃出しける。諸客皆酔ひて興  
 に入るとぞ見えし。其の中に一人盃を停めて、青天有月來幾時。  
 我今停盃一問之。」と、李白が詩を高らかに打吟じけるを、又ふたり  
 脇よりつけて、人攀明月不可得。月行却與人相隨。」とうたふ。又  
 外の人々迭に唱和して其の次を、皎如飛鏡臨丹闕。綠煙滅盡清輝

李白  
 支那唐代の大詩  
 人。名は白、字は  
 太白（皇紀一三  
 六二—一四二  
 二）

大方は云々  
 前に琴後集の七  
 に註出した古今  
 集の歌。業平の  
 作である。

發。」と謠ふ。又其の次を、但見宵從海上來。寧知曉向雲間沒。白  
 兔搗藥秋復春。姮娥孤棲與誰鄰。」と謠ふ。其の次よりは翁も助  
 言して、今人不見古時月。今月曾經照古人。古人今人若流水。共  
 看明月皆如此。惟願當歌對酒時。月光長照金樽裏。」とうたひを  
 さめけり。其の後數獻に及びて、玉山倒るゝばかりに見えけり。  
 さて翁いふやう、大かたは月をもめてじとはよみたれども、老の心  
 も月みるにぞなぐさみ侍る。されどそれにつきて、千載無窮の感  
 もおこりぬれば、うべ月を人を老となるともいふべかめり。但し  
 月を見るにいろくあり。今思ひ出し侍る。童子の時、家にて八  
 月十五夜の宴に、ひとり隅にむかつて居たりしに、さる武士の一丁  
 字知らぬが、月をつつくくと見て、『月は徑いく尺かあるべき。各考  
 へて見給へ。』といふ。また同じやうの人かたへより、『あれは物の  
 切口と見ゆ。奥へ長さいかほどかあらん。』とて、互に僉議しける



を、きく人々、皆舌をくひけり。翁もをさな心にをかしかりき。今思へば、世俗月を賞して、光のあかきをほこり、影の清きにめて、良夜とてたゞ打寄り物喰ひ酒のみなどして、歌ひのゝしるを樂とするは、かの寸尺を語るにひとしかりぬべし。又騷人墨客の月を詠めて、字ごとに金玉を雕り句ごとに錦繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、其もただ景氣の上を翫ぶばかりにて、月に深き感ある事をしらぬなるべし。翁が千載無窮の感と申すは、我儕古人を慕ひて、其の書をよみ其の心をしりつゝ、常に世をへたる恨あるに、月ばかりこそ世々の人を照し來て、今にあれば、古人の形見ともいふべし。されば月に對して昔を忍びては、さながら古人の面影もうつるやうに覺え、月はものいはねども、語るやうにもおぼえ、忘れてはむかしの事をとほまほしくも思ふぞかし。今李白が詩、月の景氣をすて、一氣に古今を洞觀して、青天有月來幾時。といひ出づるより、

杜甫

支那唐代の大詩人。名は甫、號は少陵、字は子美。(皇紀一三七二—一四三〇)

楚辭

楚の屈原の文、今日楚辭といふ書には屈原の弟子宋玉の文も集めてある。

屈子

屈原のこと。楚の懷王に代へたが讒言によつて流された。

氣象の高さ拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及ぶべき事がらにあらず。むかしより李杜とて、杜甫が上に稱するも理にてこそ侍れ。然れども李白が詩も、古今流水ごときを感ずるまでにて、後代を待つ心の見えず。翁むかし楚辭をよみて、往者余弗及。來者吾不聞。といふに至りて、屈子が心をおしはかりつゝ、感にたへずなんおぼえき。この二句の意をいふに、屈子一代に知己なきを悲しみて、古人は誠にわが心を得たれば、あはれ一度あうて語らうてとおもへど、其の世に及ばねばかなはず。又末の世にさる人こそありて、我と心を同じうすらめとおもへど、其の人をきかねば誰とかしらんとぞ。是なん屈子に限らず、古今心あるきは、大かた此の恨なきにしもあらず。翁も此の心にして月を見るにや、いと感ふかく覺ゆるなり。もとより今は末の世の昔なれば、いづれの代にか又わがごとく月に對して今を忍ぶ人もやあらん。



月はさこそ其の世をも照すらめ。もしあつらへ告げらるゝもの  
 ならば、月にさは一言をも残さましとおもひ侍る。そのこゝろを、  
 月見れば末の代までも忍ばれて  
 見ぬいにしへのいとゞゆかしき  
 こゝをもて、翁が月に無窮の感ありといへるを、諸君考へ見給へ。  
 いはれなきにはあらず。

新訂 近世名著抄 上級用終

三D 長村絳子

大正十一年九月三十日印刷  
 大正十一年十一月廿六日再版印刷  
 大正十一年十二月十七日再版印刷  
 大正十四年九月七日修正四版印刷  
 大正十四年十二月十四日修正五版印刷  
 昭和四年十月十四日修正五版發行

不許複製

新訂近世名著抄上級用奥附  
 定價金五十八錢

編者 松井簡治

發行兼印刷者 株式會社三省堂  
 代表者 龜井寅雄

印刷所 東京市外蒲田 株式會社三省堂蒲田工場

發行所 (東京市神田區通神保町一番地) 株式會社三省堂  
 (大阪市西區阿波野下通三丁目六番地) 株式會社三省堂大阪支店

發行所

【本製田蒲】



